

東アジア人文情報學研究センター
東方學資料叢刊 第18冊

工 具 書 に つ い て

— 漢籍の整理 —

永 田 知 之

京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター

2009

はしがき

この小冊子は、漢籍の整理に携わっておられる図書館職員並びに中国学や近接諸分野の学部生・大学院生（修士課程程度）を主な読者に想定している。まず、それぞれに就いて、本書を繙かれる上で、予備知識として必要と思しき事柄を若干述べておきたい。

筆者が所属する京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター（2009年4月1日改組）の前身、東洋学文献センター及び漢字情報研究センターは、文部科学省（旧文部省）等と漢籍担当職員講習会を長らく共催してきた。この事業は、2009年度以降も新たなセンターに引き継がれる。近年では毎年二回（10月の初級、11月の中級）各五日間の日程で、図書館職員を対象にこの講習会は開催され、毎回約20名の参加者が、忙しい職務の合間を縫って受講して下さる。多くの方が慣れない漢籍の書誌情報記述に最初は苦勞しつつも、熱心に学ばれるその姿には、筆者を含む運営側として敬服の他ない。

さて、個々の書籍に伴う各種情報は、それ自体のみから抽出されて、しかるべきだろう。ところが、漢籍の場合についていえば、事はそう簡単ではない。撰者を初め関係する人名が本名で記されているとは限らない。また「某年某月」と明確に刊行時期が見えることは、むしろ少数派に属していよう（十千十二支などが多用される）。

更に、運が悪ければ、それらを示す記述が、書中のどこにも存在しない場合すらある。奥付に著者名・刊行年月が明記されている現代の出版物では考えられない事態であろう。

こういった時、我々は書籍の外に解決策を求めざるを得ない。先述の漢籍担当職員講習会（初級）で、毎年「工具書について」と題した講義を設けているのは、このためである。本書はその講義内容を拡充して、広く公開しようという意図の下に編まれた。

「工具書」とは、疑問点を明らかにし、不確かな情報を確実にする点で不可欠の存在だ。漢籍の書誌情報採取に即していえば、目録学・版本学、書名、人名、地名等に関する参考書（レファレンスブック）と定義できよう。具体的にいえば、字書・辞典、目録、類書、索引、歴史年表、年鑑、百科全書などがこれに当たる。

この「工具書」という言葉だが、管見の限りで古い用例は見当たらない。少なくとも、前近代において、それは常用の語ではなかった。「知識人たる者、主要な典籍は暗誦できて当然」、かかる観念が幅を利かせた嘗ての中国では、簡便な参考書など学術史の表面に出てくる余地は無かったのだろう。何か調べる際は、まず記憶に頼り、なお不足ならば万卷の書を一葉ずつ繰って典拠を求める。実際の考証は、その過程を踏んだ後のことだった。

ただ、「工具書」なる総称は無くても、それに相当する書籍は歴代、日陰の身ではあるが陸続と作られてきた。そして近代に至り、学術の大衆化、研究分野の広範化といった学問の在り方における変化に伴い、堰を切ったかの如く、多種多様な参考書類が編まれ始めた。

それから約百年、一口に中国学の「工具書」といっても、既に膨大な数の文献が世に送り出されている。哲学・史学・文学という三大領域の各々に限っても、それらを全て網羅することがまず不可能であるのはもとより、大略の提示でさえも、容易な業とは思えない。

そこで本書は汎用性の高い、漢籍の書誌情報採取で「即戦力」となる論著を多く取り上げる。即ち、索引・参考文献目録・図版等が充実し、比較的近年の出版物やあるいは各種図書館に備えられている文献をまず本文で紹介し、それらの用途を説明する。巻末の「漢籍整理参考資料」では、その他の個別性が強い工具書（入手困難な著作も数多く含む）を列挙した。ただし、一文献や狭い特定の分野に限るインデックスを除く点は、変わらない。

また前近代中国の知の体系を反映する漢籍の整理が目的である以上、古典中国学に重点を置かざるを得ない。従って、有用と思われても、中国学に特化せぬ、あるいは近現代を対象とした論著は概ね取り上げなかった。もちろん、中には例外も少なからずあるのだが、それだけに所謂「工具書」全体からいえば、これはごく不十分なりストでしかあり得ない。

この点で、本書の記述内容は中国学専攻の大学院生などにとって、物足りないものと思われる。その原因は、叙述の主眼がまず漢籍の書誌情報抽出法だということ、そして何より筆者自身の致命的な能力不足に在る。また、専門書の出版が途絶えぬ以上、本書とて完成と同時に、否、執筆の段階ですら既に時代遅れの代物となっている点も否定できない。

こういった様々な不足を意識しつつ、敢えて学部生・院生をも対象にこれを公開するのは、中国学研究の前提となる作業法を主題とした講義が、日本の大学で多く開かれていなかったためである。個々人が研究の過程で獲得したスキルは結局、知られることも無く、後学の者はまた一から情報収集の手段を模索するのであった。自ら苦心して習得する経験は必要だが、これはあまりにも効率の悪い状況だろう。それよりは互いがもつ知識の集積を公にして、他者とノウハウを共有した方が斯学の発展に資するところは大きいはずだ。

本書が触れる各文献、殊に先行諸書の成果を踏まえた「工具書（を使いこなすため）

の工具書」に接すれば、読者は先人が開拓した広範な調査の手法を会得できる。また、それらが具える充実した文献目録を利用して、芋蔓式により深い情報を入手し得よう。知識の真実性を確かめ、研究へ発展させる役目は各人に委ねられる。だが一旦、身に付けた情報獲得の手立ては失われない。極言すれば、既存の工具書を知ることが重要なのではない。新たな工具書への対応能力を含め、自らに必要な情報収集法の確立こそが要求されるのだ。

今一つ付言しておく。本書は筆者一人の手に成ったというわけでは毛頭ない。むしろ、長年に渉る漢籍担当職員講習会の運営者（それは人文科学研究所内のスタッフに限らず、外部からご足労願った講師の諸先生を含む）との「共著」ともいうべき側面が大きい。

端的に言えば、それらの方々が平素の研鑽や講習会中に受講者との質疑応答で得られた経験による「知識の集積」が無ければ、執筆は不可能だったろう。ただし、少なくともいであろう誤謬、過不足、妥当を欠く記述の責めは、もとより全て筆者個人に存する。

本書の印刷・発行は、東アジア人文情報学研究センター教職員の全面的な支持・支援によって実現したものである。記して謝意を表したい。この『工具書について－漢籍の整理』が、わずかなりとも読者諸氏のお役に立つことを祈念して止まない。

2009年8月

永田知之

凡例

- 1.本書の内容は京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センターの前身たる東洋学文献センター及び漢字情報研究センターで毎年催された漢籍担当職員講習会中に設けられた工具書関連の講義における歴代の配布資料（講義録など）を基礎としている。
- 2.本書は「はしがき」、「凡例」の他、本文、附章、「漢籍整理参考資料」から成る。
- 3.本文では漢籍整理参考資料に収める論著等の中、特に有用かつ日本語の話者にとって比較的使用が容易と思しいものの特徴・内容を中心に、中国学における情報収集法を略述した。
- 4.附章では、工具書の使用に大きく関わる字体と漢字配列（検字）法の問題に言及した。
- 5.「漢籍整理参考資料」では本文と配列の順序を対応させつつ、各論著の表題、編・著者名、出版者・刊行年、論文の場合は加えて出典を挙げ、時に内容の簡単な紹介を附す形を取る。
- 6.本文中の算用数字（太字）は「漢籍整理参考資料」で論著名に冠したそれと対応する。
- 7.前項にいう数字（太字）のうち、斜体のものはそれが日本以外での刊行物であることを示す。
- 8.採録した論著等は日本語・中国語の刊行物に限り、それ以外の言語によるものは除外した。
- 9.特定文献上での語彙等の所在を示すインデックス（一字・一句索引を含む）は本文を併載する場合はともかく、それだけでは用をなさないので、原則として選録の対象外とした。
- 10.修改・増訂を施す文献については、できる限り最新版の書誌情報を挙げるように努めた。
- 11.原資料は索引を有していても、純粋な工具書といい難いので、概ね採録の対象とはしない。
- 12.図版を用いた方が分かりやすい場合もあろうが、諸般の事情から、その使用は見送った。

0. 「工具書」以前

まず、次の二つの引用とそれぞれの後に付した訳文を見ていただきたい。

玄德曰：「**漢左將軍宜城亭侯領豫州牧皇叔劉備**特來拜見先生。」童子曰：「我記不得許多名字。」玄德曰：「你只說劉備來訪。」（『三國志演義』第三十七回〔回目は省略〕）

〔玄德はいった、「漢の左將軍・宜城亭侯・領予州牧・皇叔の劉備が先生〔後の名軍師・諸葛亮、字は孔明〕にお目にかかるためまかりこした」。童子はいった、「そんなにたくさんのお名前は覚えられません」。玄德はいった、「劉備がまいったとだけいってもらいたい」。〕

行者道：「**纍煩你老人家與我傳答傳答、我是東土大唐駕下御弟三藏法師的徒弟、齊天大聖孫悟空行者**。今有一事、要見菩薩。」道人笑道：「老爺字多話多、我不能全記。」行者道：「你只說是唐僧徒弟孫悟空來了。」（『西遊記』第二十一回〔回目は省略〕）

〔行者はいった、「ご面倒ながらご老人それがしのためにちょっとお取り次ぎ下さい、それがしは東土大唐の天子の御弟君たる三藏法師の弟子で、齊天大聖・孫悟空・行者です。お願いがあつて、〔靈吉〕菩薩にお目通りしたいと」。修行者は笑っていった、「あなた長い口上ですな、わたくし全部は覚えかねます」。行者はいった、「唐僧の弟子である孫悟空がまいったとだけいって下され」。〕

出かけて行った先で、名前にやたらと長い肩書きを付け、それを一気にまくしたてた者が「覚えかねます」と肩透かしを食らう点に作者の意図するユーモアを感じ取るべきであろう。いま、この一人と一匹の口上（太字）を分節して示せば、以下のようなになる。

漢左將軍宜城亭侯領豫州牧皇叔劉備＝

漢（王朝名）＋

左將軍（官名）＋

宜城亭侯（爵位）＋

領（‘兼’の意）＋

豫州牧（官名、予州〔地名〕の牧〔長官〕）＋

皇叔（皇帝の叔父）＋

劉（姓）＋

備（名〔^{いみな}諱、実名〕） ※玄德（字、^{あざな}諱とは別の名）

東土大唐駕下御弟三藏法師的徒弟、齊天大聖孫悟空行者＝

東土（東の土地）＋

大唐（美称‘大’と王朝名‘唐’）＋

駕下（「皇帝」の異称）＋

御弟（三藏は皇帝の弟たる待遇を受けている設定）＋

三藏法師（僧侶の称号、この小説では「玄奘」〔法名〕を専ら指して固有名詞化）＋

的（‘の’、所有格を表す助詞）＋

徒弟（普通名詞）、

齊天大聖（〔孫悟空が天界で暴れ回った際に強要して得た〕官名）＋

孫（姓）＋

悟空（〔法〕名）＋

行者（異名）

「漢左將軍……」、「東土大唐……」の中から、肝心な姓名（本名）を切り出せという課題を与えられたと仮定してみよう。この時、後者の場合はほとんどの日本人が時間の多少を問わなければ、「孫悟空」という名前を見つけ出すのに成功すると思しい。

理由は単純である。この世界で最も有名な（少なくともその部類に属する）サルの名は、『西遊記』というよりむしろ「そんごくう」と題した絵本・児童読み物によって、日本に育った者には幼少期から耳に親しいものだからだ。一般化すれば、よく知っている事物を間違えることはそう無い、といえる。

『三国志演義』、『西遊記』は、いずれも明代（1368～1644）に最終的な成立を見た長篇小説である。「最終的な成立」といったのは、これらが共に史実を元にしながら、講談（語り物）や戯曲の形を取りつつ、長い年月を掛けて形作られた作品、つまり一人の作者が著した近代小説とは異なるからに他ならない。

『三国志演義』、『西遊記』の成立過程におけるいつの段階で、先に挙げた二つの話柄が登場したのか、それは分からない。ただ、いずれにもせよ、これらは遥か後世の外国人である我々だけでなく、前近代の中国人自身が、こういった肩書きの多用、切れ目の無い言葉の連続に辟易し、時にそれを茶化すこともあった証拠となろう。まして、後者

は人間ならぬサルがやはり非人間の世界、即ち天界にも存在するとされたヒエラルキーでの位階を振り回すのだから、より皮肉が効いている。

近年の『三国志（演義）』ブームで、劉備の知名度もすっかり上がったことと思われる。しかし、なお孫悟空の人気には及ばないのではないか。特に知識の無い人物が「漢左將軍」云々というくだりを目にした際における「理想的（？）な言葉の分節法」を考えてみよう。

「漢左將軍宜城亭侯領豫州牧皇叔劉備」：

- ①「將軍というのは今でも国によっては使われている職名だよな。となると“漢左將軍／宜城亭侯領豫州牧皇叔劉備”と区切れるかもしれない」。
- ②「‘漢’とか‘唐’とかは世界史の授業で、国だか王朝だかの名前として習った覚えがある。だったら“漢／左將軍／宜城亭侯領豫州牧皇叔劉備”でいいかな」。
- ③「‘劉’は中国人の姓になりそうだ。そうだとすれば‘備’の方は名前、併せれば姓名で、“漢／左將軍／宜城亭侯領豫州牧皇叔／劉+備”だろうか」。
- ④「‘侯’は公侯伯子男の一つならば爵位だから、“漢／左將軍／宜城亭侯／領豫州牧皇叔／劉+備”なのか、‘領豫州牧皇叔’のうち‘州’は地名に使われるような気はするが……」。

結局、「領豫州牧皇叔」が何かは不明のままだが、それは措くとして。もちろん、ここに書き列ねた意識の流れは、あくまでも理想である。手持ちの情報だけで、こうも正確な分節にたどり着くのは、容易ではない。「將軍」や‘州’などといった普通名詞はいざ知らず、例えば③の‘劉’が中国人の姓だということは一般的な日本人の知識とは考え難い。

また、別の課題も存在する。中国で普通に見られる姓は、日本のそれよりずっと少ない。仮に、普段から中国人の姓名に注意していたとしても（むしろ、本書の読者ならばそうであって当然だが）。この場合、‘劉’を姓と判断するのは、ごく簡単である。

具合が悪いのは‘侯’だ。アジア映画愛好家ならば、侯孝賢^{ホウシャオシエン}氏の名前をご存じかもしれない。この台湾の著名な映画監督の姓名は「侯（姓）+孝賢（名）」と分けられる。

この知識を前提に「宜城亭侯領豫州牧皇叔」を見ればどうなるか。「この‘侯’は姓だ」と判断し、「侯領」乃至「侯領豫」という人名がそこに潜んでいるとも考えかねない。これは漢字の多義性（‘侯’は姓で、かつ④で示した如く爵位の意味も有する）、複数の意味を知るが故に起こった誤りだ。情報は多ければ多いほどよい、というわけで

もないのだ。

肩書きと名前の羅列について、長々と書いてきたのは他でもない。漢籍の書誌情報採取で、我々は『三国志演義』の童子、『西遊記』の修行者と同様の状況に度々出くわすからだ。

中国語はそもそもアルファベットで綴られる欧米語のように単語の切れ目が明確でない。所謂「標点本」には「断句」が施され、時に人名（「劉備」）・地名（「豫州」）等の固有名詞に下線が付されもする。ただし、それは、あくまでも現代人が読者の便宜を考えて加えただけに過ぎない。先に挙げた『三国志演義』の一節も、本来は次の如き形を取っていた。

玄德曰漢左將軍宜城亭侯領豫州牧皇叔劉備特來拜見先生童子曰我記不得許多名字
玄德曰你只說劉備來訪……

古典の標点本は、なお種類が限られる。漢籍とは概ね句読点も引用符号も無く、篇章の間を除けば改行すら稀な文字の連なりが延々と続くものなのだ。必要に応じて我々はこの「のっぺらぼう」の文章を切り分けつつ、研究乃至書誌情報の採取を進めねばならない。

ここまで読まれて、早くも漢籍と相対する気の失せた読者がおられたならば、少し待っていただきたい。実のところ、子供の頃から曲がりなりにも日本で漢字に日々触れてきた我々が、文字の連なりを見て、全く何の見当も付かないという事態はまずありそうもない。当否を問わなければ、10 字以上連続した漢字のどこかに何らかの意味を見出せるはずだ。

こういった最初は「意味不明」ともいうべき文字の羅列を見た時に重要なのは、

①**まず知っている、あるいは分かる（ような気がする）文字を取り出すこと**である。先に挙げた『西遊記』の「孫悟空」、『三国志演義』の「將軍」が「知っている」、「漢」や「劉」はそれらより確実性は少ないが分かる（ような気がする）文字に当たるだろう。
②**次にこれらを取り出す過程と並行して、全ての方向から検討を加える**。簡単にいえば、「宜城亭侯領豫州牧」は「宜城亭侯」とそれ以下に分かれるのか、「宜城亭」と人名「侯領（豫）」及びその他から成るのか、迷えば複数の方向から調査してみる必要があるのだ。

ここに至って、調査するための本、即ち本書の主題がようやく登場する。「漢左將軍宜城亭侯領豫州牧皇叔劉備」という一節を単なる文字の連続と認識して、何も考えずに

工具書へ飛び付いたところで、得るところは少なからう。第一、そのような状態では人名・地名等の用途別に編まれた事典・辞典類のどれを用いて、どの語彙を調べればよいか分かるまい。

逆にあらかじめ見当を付けておけば、一つの調査で多くの情報が得られることもある。

52『アジア歴史事典』で「**劉備**」という言葉を引きと、その第9巻281頁右の説明に「……曹操は……彼を……**宜城亭侯**に封じた(196)。……曹操は彼を**豫州牧**とし、……」とある。

この場合、まず「劉備」は一語と見当を付けて、それを調べれば「宜城亭侯」、「豫州牧」も各々単語（で恐らく称号）と分かるわけだ。もちろん、最初是这样簡単に作業は進まず、一連の「意味不明」な文字について、何度も検索を繰り返すことになる。ただ、煩わしいにせよ、これは初学者が当然踏むべき必要な手続きと思ってもらいたい。要は、闇雲に調べ始めるのではなく、「この文字は何（っぽい）か」考えた上で**工具書を手取る**、これが漢籍の書誌や内容などに関して調査する際の大原則なのである。

次章以降、いくつかのケースに即して、漢籍の書誌情報採取等において、①どのような工具書が存在するか、②またそれらをいかに使用するか、について述べていくことになる。それに先立って、本書本文の工具書採録について、方針というべき事柄二点を述べておく。

①中国学の工具書だから、中国語で記述されたものが当然多い。専門家やその卵である学部生・院生はともかく、中国語の知識が無い方は、扱いに戸惑われるかもしれない。

日本語・中国語双方で類書がある場合、本書が前者を優先するのはそのためだ（索引類等は使用法が分かれば、機械的に検索できるから、特段の語学的知識は不要だが）。なお、**中国語文献のうち表記に簡体字を用いるものには、その旨を注記しておいた。**

②取り上げた工具書には、現在では入手困難な論著も少なくない。手に入るとしても、予算・収納スペースの都合もあるから、多くを（特に個人で）揃えるのは難しいだろう。

この問題に関して、有効な解決法は残念ながら示せそうもない。ただ、最終章に中国学の分野でも大きな力を発揮しているコンピュータ、特にインターネット上の検索について、項目を立てておいた。文献の不足を、それが幾分なりとも補い得ればと思つてのことである。

I. 目録学・版本学基礎知識—全体の参考書

最初に、漢籍の書誌情報採取という分野に特化した類書の稀な専著を一つ挙げておく。

1『漢籍目録－カードのとりかた』 ※巻末に語彙索引、(図版に挙げた)書名索引付。京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター(現東アジア人文情報学研究センター)の漢籍目録カード作成要領。平常の業務や長年に渉る漢籍担当職員講習会等で教職員が培ってきた経験を盛り込む。できれば本書と併せて、参照されたい。以下、『漢籍目録』と略す。

i. 目録学関連論著

表題にいう「目録学」とは、中国特有の図書分類法、目録作成に関する学問領域を指す。目録学の概略を理解しておかなければ、書誌情報の採取にも支障を来す。「経部」とは何か?、「なぜこのような分類に?」という状態では、実際の作業が立ち往生してしまう。膨大な蓄積の中から、ここでは日本人による古典的著作と近年の著述の二種を挙げておく。

5『目録学』 ※五十音順書名索引・人名索引(巻末)付。清代に至る目録学の通史。

10『知の座標』 ※主要参考文献(リスト)、索引(五十音順)を巻末に附す。

ii. 版本学(『漢籍目録』16・17、82～85頁参照) 関連論著(含図録)

この「版本学」は版面を始めとした漢籍の形式(「題簽」や「版心」といった名称等)や鈔刻に関する知識を指す。実際の作業で一見して刊本と活字印本を判別しかねることなど稀ではない。普段から漢籍の実物に触れ、書影の図版にも目を通しておくべき所以である。

A. 中国書(所謂「唐本」、中国で刊刻・書写された漢籍) 対象

24『漢籍版本入門』 ※書名・人名索引、術語・事項索引(五十音順・巻末)付。形式・鈔刻について詳しい。図版や訳者が本文の後に付した参考文献案内も充実。

25『漢籍版本のてびき』 ※事項索引(書名・人名を除く、五十音順・巻末)付。

形式・鈔刻・鑑別を中心課題とする。本文の後に附された附録（参考文献案内）も有用。

26『図版中国印刷史』 ※書名・人名・事項索引（五十音順）、略年表を巻末に附す。
書名のとおりに印刷史が主題、静嘉堂文庫所蔵の漢籍を初め約 200 点の図版が収載される。

B. 和本対象

漢籍が主題ではないが、それをも含む和本（主に江戸期刊本）関連の専著を挙げる。

31『書誌学談義』 ※五十音順索引（書名・術語・事項）を巻末に附す。

付録「板本書誌学関係文献目録」も有用。前半各章末尾の「用語メモ」等、説明は明快。

32『和本入門』 ※用語索引、参考文献（リスト）を巻末に附す。

著者は古書肆経営者。その関係もあって独自の見方に富み、また和本の保存法にも言及。

C. 朝鮮本（所謂「韓本」、朝鮮半島で刊刻・書写された漢籍）対象

33『図説 韓国の古書』 ※巻末に参考文献リスト、五十音順索引（書名・術語）付。
古書（概説）、板元、分類の三つに分けてそれぞれの歴史を概観。図版はオールカラー。

D. 図書学・書誌学辞典：日本語による、評価の定まった辞典を二種挙げる。

36『図書学辞典』 ※巻首：索引、巻末：干支・十二月異名表、避諱欠筆表、参考文献。
序説・装訂・大小・写本・刊本・部分・テキスト・雑・分類の 9 項に分けて用語を解説。

37『日本書誌学用語辞典』 ※巻末：日本書誌学関係著作目録、所収標目語彙目次。

五十音順に術語等を配列、図版多数。**36**が漢籍主体なのに比べて対象が和本に特化。

他に **282『中国古籍版刻辞典』**、**283『日本古典籍書誌学辞典』**（VI. i.）等も有用。

II. 漢籍の概略把握

i. 整理・目録法：漢籍の整理・目録法を学ぶ過程で「いかなる工具書があり、それらをどう使うか」という疑問が浮かぶのは、至極当然だ。工具書の使用と整理・目録法を直結させた解説として次に掲げる **44『漢籍－整理と研究』** 誌の各文が、まず役に立つだろう。

- a. 「Q&A 工具書の活用と校合の必要性」
- b. 「Q&A 集部の分類と工具書」
- c. 「漢籍整理での工具書 その一」
- d. 「漢籍整理での工具書 その二」
- e. 「Q&A 漢籍整理での工具書 その三」
- f. 「漢籍整理と工具書の活用」

a.、b.と f.は漢籍の目録カードを作成する過程を具体的な Q&A 式で解説している。この点で『漢籍目録』と比べれば、より参考になる。a.と b.は末尾に工具書を挙げる。c.は概括的な、d.は個別的な参考書を扱い、e.は経・史・子の各部に関する工具書等を列挙・解説し、b.と併せて参照し得る。いずれも分野・分類ごとに書籍を配列する。

なお、一点だけ中国学全般に渉る書籍に触れておく。同書は工具書の解説にも一章を割く。

45『中国古典を読む はじめの一步』 ※「古典を読むために知っておきたいこと」、「目録学の初歩」、「工具書・入門書を利用しよう」と附編「日用類書について」から成る。

前者、44『漢籍』誌所収の諸篇で言及される工具書の量は、日本語による類似の文献中、群を抜いている。後者 45 は本書と同じく図書館職員以外に学生・院生も対象とし、著者は長くその指導に当たった大学教員である。共に本書と併せて参照されることが望ましい。

ii. 書体字典：文字が判別し難い時（例『漢籍目録』11 頁上段、31 頁上段右図版）。

楷書以外の書体で本文が記された鈔本（写本）は少なくない。刊本ではさすがに全体が非楷書ということは稀だが、刊記及び序跋に関してはそうとも限らない。

前者ならば篆書、時には隸書で、後者では行書・草書で印刷されるケースが往々にして見られる。しかも、序跋では印刷であっても手書きの文字を写し取った「手写体」をしばしば用いる。著名人の筆跡で書物に箔を付けようとする意図も、そこに看取される。

識語（書き込み）を除いて、他に序跋、題簽、木記、印記、題字、書名（扉）、題・讚・歌等も手書きの場合がある。いずれにせよ、文字が読めなければ話にならない。

書法に心得がある、または書道を嗜む方ならばともかく、そうでなければどうするか。まずは回り道だが、書名などは同じ内容が書中のどこかに楷書で書かれていないか探す。それに対応できない時は、書体辞典を使う。複数の書体に渉る代表的なものを挙げる。

46『五体字類』 ※一字ごとに概ね楷・行・草・隸・篆の各書体を有名書跡等から掲載。

47『書道大字典』 ※体裁は46に同じで規模大。部首・音訓以外に総画索引を附す。

48『行草大字典』 ※一字ごとに行・草書及び章草のみを掲載。他は46、47に類似。

部首で配列（漢和辞典型）し、索引（部首・音訓）を附す点は全て等しい。類書は多いが省略、異体字の問題も含めて「漢籍整理参考資料」IX、等も参照してもらいたい。

ただ、「読めない文字」を相手取る以上、これらの辞典はまず「この字か？」と見当を付けて、その確認に用いることとなる。この「見当」を得るにはやはり慣れが必要だ。

それだけに、普段から漢籍の書誌情報採取に必須の文字、例えば十干十二支、‘年’、‘月’、‘刻’などはいくつかの書体を記憶しておく必要がある。また、主立った部首も覚えておくのが望ましい。これらを組み合わせれば、読める文字は飛躍的に増加する。

iii. 辞典・事典類

ここでは、多方面の事柄について、一定程度の知識が得られる辞（事）典を紹介しておく。

49『大漢和辞典』 ※正字使用、人名・地名・書名・官名・事項名、文章語（古典語）。

50『大漢和辞典』語彙索引、51『大漢和辞典』補巻 ※両者併せて49の使用に役立つ。

人物の生卒年は通常示さない。その他にも、典拠となる文献を示さない場合がある。

52『アジア歴史事典』 ※五十音順配列、最終巻末尾に見出し語他の五十音順索引付。

人名（別名ではなく本名）・書名・官名・事項名、地名（重要行政区、要地、旧跡）。

53『中国学芸大事典』 ※五十音順配列、見出し語の総画索引（巻末）付。

人名（文化畑の人物、それも通常は別名ではなく本名限定）、書名などで効果を発揮。

次章以下で述べる個別の参考書と異なって、守備範囲が広いだけに、各項の記述量は少なくならざるを得ない。ただ、漢籍の概略を把握する点で、これらの辞典類は極めて有用だ。

Ⅲ．書名による調査—解題と目録

i．**解題**：**解題**と**目録**、両者は、截然と区分できるわけではない。いま、仮に書籍自体を対象とするものを解題、ある場所に存在する書物に即したものを目録としておきたい。書名（時には撰者名）が明らかな場合、解題を見ることがその漢籍を知るには最も近道だ。解題は**全般型**、**特化型**の大きく二つに分かれる。以下、各々について説明する。

A．全般型の解題

時の政府が書籍目録の形で、各時代の学術を総括するのは、中国史の伝統だった（後述する正史の目録がその典型）。この流れを汲む王朝時代最後の試みが、清（1636～1912）による「四庫全書」編纂事業だ。それまでの主要な典籍を網羅し、重要なものは実際に写本を作成、その上でやや劣ると判断し「四庫全書」への収録に至らなかったものを含め、全ての文献に解題を作ったのである。これらの解題は「提要」と称され、各典籍について最も基礎的な情報を提供する。各書に附す提要のみをまとめたのが、次に挙げる文献だ。

55『四庫全書総目提要』 ※全国漢籍データベース（IX.）から閲覧・検索可能。

18 世紀中頃までの著述を対象とした大規模な解題集、扱う漢籍は 10000 種を超える。分量が膨大だから、日本語の全訳は無いが、領域ごとの選訳は存在する（56～60）。

なお、「四庫全書」の編纂は、新たに政府公定のテキストを作るという性格を帯びていた。従って、提要はあまり既存のエディション（版本）に関して、筆を費やさない。この不足を補うのが、**64『四庫全書簡明目録』**などであり、更にそれを増補した下記の文献だ。

65『増訂四庫全書簡明目録標注』

上掲 **64** に基づき、内容の解説を省き、**単行本・叢書所収本**など**版本関連の情報**を記す。

叢書「四庫全書」やその提要は 18 世紀中葉に編纂された。つまり、それ以降の文献及び解題は当然そこに見えない。また既に存在した典籍でも、①価値が無いと思われた（俗語による戯曲・小説など）、②支配層に不都合な内容を含む、③中国に（良好な）テキストが存在しない（周辺諸国から後に逆輸入された書籍は少なくない）という場合もある。「0.「工具書」以前」で挙げた『三国志演義』や『西遊記』さえ①の理由で入

っていないのだ。

18 世紀後半以降も、清朝考証学を初めとした学術の成果が次々と世に問われてきた。更に版本の側面から見れば、我々が扱うのはほとんどそれ以後のものといって過言ではない。こういった **55『四庫全書総目提要』** 未収書の解説として、以下のような文献が存在する。

66『販書偶記』 ※四角号碼書名索引、筆画検字（巻末）、**55 未収の著作が対象。**

67『販書偶記続編』 ※四角号碼書名索引、筆画検字（巻末）、**対象は上に同じ。**

この両著は 20 世紀前半に北京で書肆を営んでいた著者が目睹した**単行書**のリストで、**版本情報**に富む。

69、70、71『続修四庫全書総目提要』 ※同じ編纂事業によるが、各々に異同がある。**55 以降やそれに漏れた著作の大規模な解題。66、67**と主な時代範囲は等しく、やはり鈔刻に関する情報を記す点が重要。**71** が最も完璧で 33000 種を超える文献の解題から成る。

B. 特化型の解題：四部分類の部・類や鈔刻地などごとに様々な解題が編まれてきた。

詳しい解題から試みに史籍全般、地方志、和刻本、朝鮮本に特化したものを挙げる。

○**史籍**（史部書が多くを占めるが、それに限らず歴史研究に使用される文献が対象）

73『中国史籍解題辞典』 ※書名の五十音順配列。書名拼音索引を巻末に附す。

○**史部・地志**（地方志、『漢籍目録』122～129 頁参照）

75『中国地方志聯合目録』 ※地域ごとに配列。書名四角号碼書名索引（巻末）付。

76『中国地方志総目提要』 ※地域ごとに配列。書名・著者画数索引（巻末）付。

内容の解説は後者の方が詳しい。前者は画数・四角号碼相互の対照表を最後に附す。

○**和刻本**（『漢籍目録』110・111 頁参照）：日本に現存する漢籍では圧倒的な数量を占める。

104『和刻本漢籍分類目録・増補補正版』 ※校点者・書名五十音索引付（巻末）。

和刻本の書名、巻数、撰者・校点者、鈔刻などについて網羅的な情報を提示してくれる。

○朝鮮本

105『日本現存朝鮮本研究 集部』 ※詳細で網羅的。集部以外続刊予定。CD-ROM 付。所載の情報が部分的に検索可能な Web page がある（「漢籍整理参考資料」Ⅸ．参照）。

ii. 目録：漢籍の場合、**A. 史書に収める目録等**が最も長い歴史をもつといえよう。

『史記』以降、中国では「二十四史」（「漢籍整理参考資料」**188『二十四史人名索引』**の項参照）や「二十五史」（同 **185『二十五史人名索引』**の項参照）と称する「正史」の類が、多く公権力の手により（滅びた王朝の史書を後続の王朝がという形で）連綿と編まれた。各正史において「芸文志」、あるいは「経籍志」と呼ばれる部分が今日いう目録に相当する。

106『漢書芸文志』を初めとして、少なからぬ正史が含むこれらは、それぞれの時代、（主に宮廷の図書所蔵機関に）存在した典籍の書名・撰者名・巻数などを記している。早くに滅んだ書籍、乃至エディションに関するもの等、それらは甚だ貴重な情報を提供する。

「漢籍整理参考資料」Ⅲ．ii. **A. 106～117**には正史や政書等、史書所載の目録等を集めた。中には単行のもの、その正史が「芸文志」や「経籍志」を立てていないため、後人が諸資料を勘案し、その時代にあったであろう文献の目録として補作した著作も包含する。

かかる「芸文志」の類を除くと、所謂「漢籍」の目録は大雑把に次の五つに分かれる。

B. 個人の目録：個人が所蔵した、また目睹した漢籍の目録。広くは、ある書籍について記した文章、即ち題跋や題記を集めた文献などもこのうちに入るだろう（**118～123**）。

C. 公的機関の目録：近現代でいう「図書館の目録」、例えば **141『東方文化学院京都研究所漢籍目録』**は書名にある研究所に 1937 年までに入手した漢籍の目録である。一方、**144『京都大学人文科学研究所漢籍目録』**は原則として 1975 年度末以前に東方文化学院京都研究所を淵源の一つとする京都大学人文科学研究所の蔵書となった漢籍を著録する。

両目録の間には、約 40 年の歳月が横たわる。ただし、研究所自体は同じ流れの上に在る。現に **141**が著録する漢籍はほぼ **144**にも見られる。ただし、体例の改変、情報の訂正等もあるので、他の工具書同様、目録も当然、最新版を参照せねばならない。近年は多くの図書所蔵機関が Web page を設けている。それらを一々紹介はしないが、そこに見える蔵書検索システムとこの種の冊子体の目録（**124～157**に若干を挙げた）とを併用する必要がある。

D. 所蔵機関・所蔵者を限定しない目録：B. と一部重複するが複数機関に蔵される、善本ならばそればかりを輯めた目録等がこれに当たる（「漢籍整理参考資料」158～164）。

E. 目録の集成：全てと重なり得るが、主要な目録・題跋を収めた影印本などがある。

いざ、調査という段階で、いきなりこれらの目録を手当たり次第に開いても、効率が悪い。「どのような（規模の大きい）目録があるか」をまず知った上で実際に調べ始めた方がよい。F. 目録の目録というべき著作が見られるのはこのためだ。ここではC. について、即ち「日本にはいかなる漢籍の収蔵とその目録が存するか」をまとめた論著を挙げておく。

172『増訂日本における漢籍の蒐集—漢籍関係目録集成—』 ※所蔵者名五十音索引付。

173「本邦漢籍目録書目」、174「本邦漢籍目録図録及び解題編書目」

この三種は資料 124～150 と同類の目録を図書館などの所在都府県別に配列している。

@書名参考書

解題にせよ目録にせよ、検索するのは書名、それが明らかでなければ、撰者名で引き、見当を付ける（その人物の著述が多いほど書名の特定は困難だが）のが、大凡の筋道だ。ところが、厄介なことに書名は漢籍一種につき一つと限らず、別称が存する場合がある。

別称でも検索できる解題・目録は数多い。ただ、それらとて際限なく別名をカバーしきれぬわけではない。このような同書異名の煩瑣さを緩和する専著を一件紹介しておく。

177『同書異名彙録』 ※画数順配列、筆画検字（巻首）、収録書名は 13500 余条。

漢籍の撰者・鈔刻を掲出した上で、その別称を示す。一般的書名・別称双方で検索可能。

本書冒頭で挙げた『西遊記』を例にしてみよう。177『同書異名彙録』260 頁に「西遊記二十卷一百回……明金陵世徳堂刊本 又名：唐僧西遊記」、「西遊記四卷四十回……清道光十年四遊記本 又名：西遊記伝、唐三蔵出身伝、唐三蔵西遊全伝」、「西遊記伝四卷四十回……清嘉慶十六年四遊記本 又名：西遊記、唐三蔵出身伝、唐三蔵西遊全伝」とある。書名の差異に伴って版本も異なるから、厳密な意味では、これらを同一書とはいえない。

ただ、それらを見れば『西遊記』、『唐僧西遊記』、『西遊記伝』、『唐三蔵出身伝』、『唐三蔵西遊全伝』が同種の文献を指すと見て取れる。ことほどさように、一書が様々

な表題をもつことがあるのだ。仮に『唐三蔵出身伝』などというマイナーな書名の版本が手元にあったとする。通常の解題・目録でこのタイトルが見出しに立っていることはまず無い。

この時、177『同書異名彙録』714 頁で『唐三蔵出身伝』の項を開けると「又名：西遊記伝、唐三蔵西遊全伝、西遊記」と見える。かくて『唐三蔵出身伝』とは、実は『西遊記』、即ち孫悟空が活躍する物語らしいと中身を見る前に労せずして予備知識が得られるわけだ。

『西遊記』のようにメジャーならばよし、さもないと複数ある中のどれが正式な書名か分からない。面倒だが、その場合は何度も解題・目録を当たって、一般的な書名を割り出すしかない。ただし、書誌情報としては現にある漢籍に見える題名を採るのが基本だ。

さて、本章を閉じるに当たって、「目録を見る」ということの効用を考えておきたい。第一に、目録の記載は書誌情報の採取と記述に参照し得る。多くの機関では、抽出した情報を専用のカード等へ書き記す。その段階を経て、定着した最終形態が目録の記述だ。漢籍の収蔵に富み、権威を認められた図書館の目録ほど参考に資する価値は高かろう。

第二に通常、解題ほど詳細ではないが、いま眼前にある漢籍について何らかの情報は得られる。少なくとも書名が目録に見え、また同名異書でなければ、分類から幾分かその性格は分かる。撰者・（本来の）巻数が現物では不分明でも、目録の記述が助けとなろう。

しかし、果たしてそれに寄り掛かるだけでよいものだろうか。いかに複数の目録に同じ記述が見えようとも、それは他機関が所蔵する、あるエディションの情報に過ぎない。

もちろん、ある文献に疑問を抱く、または内容を知りたい時、既存の目録・解題を顧みない法は無かろう。だが、いま手に取っている漢籍とそれらが著録するものが同一の版だという保証は全く無い。書名・撰者名もそうだが、殊に鈔刻は先行の目録などに見られる情報を鵜呑みにすることは危険であり、あくまでも現物こそ重視すべき点に留意されたい。

IV. 人名の検索

章題とした「人名の検索」という言葉は二つの側面を含む。一つ目は別名等から本名を探り出す、二つ目は某人がどのような人物でいかなる経歴をもつかを調べる作業だ。

皆が姓と諱（実名）だけを使うのなら、苦労は少ない。実際は「玄德」はともかく「漢左將軍宜城亭侯領豫州牧皇叔劉備」、「齊天大聖孫悟空行者」（いずれも本書冒頭を参照）などと封爵、官職その他が混在した記述が多い。ここから「劉備」、「孫悟空」を抽出し、更に前者と「玄德」の対応を理解して、彼らの素性を知る方法を考えるのが本章の課題だ。漢籍が記す撰者名の例に即して、まず人物が生きた時代を軸に叙述を進めたい。

i. 全般型の人名索引

A. 広範囲、隋代以前の人物：「時代を軸に」とは述べたが、そもそもその人物がいつ活動したかが分からないことも多い。漢籍に見える時代未詳の撰者等について知るには、次の手段がある。

- ①書名を解題・目録（Ⅲ．）で調べて撰者らの情報も得る（その可否は個別に考える）。
- ②辞典・事典類（Ⅱ． iii.）で人名を調べる（書名を引いて撰者などの時代を割り出すのも可）。
- ③特定の時代を対象としない人名検索用の工具書を見る。次にその具体例を挙げよう。

『漢籍目録』57 頁上段右図版『霜紅龕集』卷一第一葉表第二行に「陽曲傅山青主」とある。

180『中国人名大辞典』 ※画数順配列、筆画検字（巻首）・四角号碼索引（巻末）付。

姓が‘傅’、名が‘山’と考えて検索すると、同書 1129 頁第一段の記述から「傅山」の籍貫が「陽曲」（山西省）、字は「青主」で、清人と分かる。清代の人物に特化した調査方法は本章本節 F. 参照。広い時代に渉る人名事典の類として、他に以下のようなものがある。

181『中国人名大詞典・歴史人物巻』 ※簡体字、画数順配列、筆画索引（巻首）付。

中華人民共和国建国（1949 年 10 月 1 日）以前に没した人物約 14000 人を収録。

183「歴代人物年里碑伝綜表」 ※生年（乃至没年）順配列、筆画人名索引（巻末）。

概ね 1919 年以前に没した著名人の字号・籍貫・享年・生卒年・備考（出典）を掲出。

後者は人名辞典と異なって説明的記述は無いが、各人の基本情報は知り得る。

『漢籍目録』39 頁中段右図版『精鐫合刻三國水滸全傳』卷一第一葉表第二行に「晉 平陽 陳 壽 史傳」とある。「陳壽」が姓名（実際は書誌に採らず、『漢籍目録』62 頁を参照）。

晉（265～420）は王朝名、隋（581～618）以前の人物について元来、正史（Ⅲ. ii. A.）の他に資料は乏しく、特段の事典も無く、本格的に調べるとなると専門に渉る嫌いがある。簡便に調査を済ませるには、人名事典など以外に次の諸索引を使う手段が存する。

185『二十五史人名索引』 ※以下四種、人名は四角号碼で配列、筆画検字（巻末）付。

186『二十五史紀伝人名索引』

187『二十四史紀伝人名索引』 ※この三種は原則的に姓+名の形で検索（字^{あざな}等は不可）。

188『二十四史人名索引』 ※字などで引くと、該当個所にその人物の姓+名の形を示す。

185以下の三書は某人の名を引けばその伝記（帝王は「本紀」、臣下は「列伝」）が正史の第何巻の何頁にあるかを示す。**188**は伝記の有無を問わず、ある人名が正史中のどこに見えるかを全て挙げる（底本は **185**のみ開明書店版、他は中華書局標点本）。

一見、**188**が最も便利のように思える。ただし、同書は『史記』以下の各正史個別に編纂された人名索引を、そのまま影印・合本したものだ。つまり、その人物がいつの時代に生きたか知らないと使い難い。従って、前掲の人名事典や **186**以下の三種で時期を確かめた後、更に調査を進めるならば、**188**で網羅的に伝記事実の記述を調べるとよい。

さて、「陳壽」に話を戻そう。先に掲げた記述では、彼の名に「晉」という王朝を表す文字が冠せられる。そこで、**188**中の「晉書人名索引」を調べると、451 頁下段右に「陳壽（承祚）」とあり、「82/2137* 20/636……」という数字が並ぶ。これは「陳壽」が「承祚」という別名（彼の場合は字）をもち、標点本『晉書』卷八十二の 2137 頁に伝記があり（「*」はその存在を意味）、卷二十の 636 頁等にも名が見えることを示す。

B. 唐・五代の人物

『漢籍目録』55 頁下段右図版『毛詩注疏』卷一第一葉表第二、第三行：

漢鄭 氏撰

唐孔穎達疏

「唐・孔穎達・疏」は、更に「唐・孔+穎達・疏」と切り分ける。「唐孔・穎達」の可能性は隣の「漢鄭氏箋」を見て、「鄭」と「氏」の間の空格も考慮すれば考え難い（漢・唐は王朝、鄭・孔は姓と解するのが正しい）。唐人の伝記を知るには、次の索引が役立つ。

191『唐五代人物伝記資料総合索引』 ※四角號碼順配列。字号索引と筆画検字を附す。

185 頁左に 9 種類の文献が載せる「孔穎達」の伝記及び関連記述の所在が示される。

C. 宋代の人物

『漢籍目録』25 頁下段右図版『易小傳』卷一第一葉表第一、二行：

易小傳卷一上

吳興叢書

宋吳興沈 該著

第一行に「吳興叢書」とあるから、「吳興」は一語と見当が付く。‘著’は現代でも用いる著述したことを表す文字だ。「宋吳興沈 該著」から「吳興」、「著」を除けば、‘宋’と「沈 該」が残る。‘沈’と‘該’との間の空格も考慮して、これは‘宋’の姓は‘沈’、名は‘該’という人物が撰者らしいと分かる（書誌情報採取の際はここで見た空格やそれ以外にも小字などの他と異なる個所に注意）。宋人の人名録を、次に三種挙げる。

192『宋人伝記索引』 ※姓名画数順配列（僧・道士は末尾）、五十音首字索引（巻末）。

194『宋人伝記資料索引』 ※姓名画数順配列、筆画検字（各巻首）、引用書目付。

195『宋人伝記資料索引補編』 ※体裁は上に同じ。**194**に漏れた人物や情報を補う

192は人物ごとに姓名・字・籍貫・生卒年（年齢）・曾祖父・祖父・父、典拠資料・出典を列挙。**194**及び**195**は各人物について簡単に紹介した後、関連する資料の所在を示す。

194の 682 頁に「沈該」は「字守約、吳興人、時升子。……」と見え、引き続き 22 種の関連資料とそれらの出典を示す。これで「沈該」を宋人の姓名と判断した妥当性、「吳興」が彼の籍貫という事実が確認され、その事跡を知ることでもある。

D. 遼・金・元代の人物

『漢籍目録』39 頁中段右図版『精鐫合刻三國水滸全傳』卷一第一葉表第二、第三、第四行：

晉 平陽 陳 壽 史傳
元 東原 羅貫中 演義
明 溫陵 李載贇 批點

‘晉’の「陳壽」（本節A. 参照）と同様に‘元’の「羅」が姓、「貫中」が名前という人物だと考えてみる。元や同じ征服王朝の遼・金に関する人名事典には、次のものがある。

196『遼金元人伝記索引』 ※画数順配列、画数順人名・字号別名索引（巻末）付。

198『元人伝記資料索引』 ※画数順配列、筆画検字（各巻首）、引用書目（冒頭）付。モンゴル等が支配した時代背景を象徴して異民族を多く収録する。姓+名から成る呼称を必ずしももたず、漢字名も実は音訳である彼らは別立て（第4冊後半）になっている。

196は姓名・字・号・本貫・生卒年・年齢・曾祖・祖父・父・子・孫、姻戚及び典拠資料を列挙する。**198**は各人物について簡単に紹介した後、関連する資料の所在を示す。

さて、「羅貫中」は両書共に見えない。ここで「貫中」は別名かと疑い、**198**第5冊の別名索引で調べてみる（この種の索引では別名検索ツールを附す場合が比較的多い）。

その169頁右に「貫中：羅本 IV/2086」というので、第4冊2086頁「羅本」の項を見ると、「字貫中、號湖海散人、太原人（或作杭州人）。……撰有雜劇「風雲會」、又編撰小説數十種、「三國志演義」尤盛行於世」とある。ここから「羅貫中」の「貫中」は字で、諱は「本」といい、『三國志演義』を著し（たと伝わり）、「東原 羅貫中」の東原（山東省）以外に、太原（山西省）や杭州（浙江省）の出身という説の存在が知られる。

E. 明代の人物

書誌情報、とりわけ鈔刻について多く調べることになる人名は、明人と清人のそれだろう。これは我々の手にする書物としての漢籍が通常、明代か清代のもの（後者の方が遥かに多いが）であるためだ。

『漢籍目録』39 頁中段右図版『精鐫合刻三國水滸全傳』卷一第一葉表第四行：

明 溫陵 李載贇 批點（本節D. に挙げた記述の一部を再掲）

200『明人伝記資料索引』 ※画数配列、筆劃検字（巻首）、字号索引（巻末、検字付）。明清人文集 528 種、史伝 65 種、年譜その他における伝記の所在を示し、簡単に紹介。

201『明人室名別称字号索引』 ※画数順配列、筆画・四角號碼検字（各冊巻首）付。

上冊：「別名」を見出しとして、後にその人物の「姓名」（本名）を挙げる。

下冊：「姓名」を見出しとして、「籍貫」、「字」、「号、別称、室名等」を挙げる。

「李載^{さいし}贇」は両書共に出てこない。「載贇」を各々の別名索引で探しても同様である。

202『明人別名字号索引』 ※画数順配列、筆画・ウェード式ローマ字検字（巻首）付。

別名・字号から、本名が分かる（他の情報は無い）。巻末に姓+異名の異名表を附す。

同書 772 頁左に「載贇：李贇」とあるので、「（李）載贇」の姓名は「李贇」らしい。

200、201に戻って「李贇」を検索、前者 228 頁左「李贇」の項に「字卓吾、晉江人。……」とあり、彼の伝記資料 7 種とその所在を示す。更に後者下冊 154 頁によれば、「載贇」は原名（‘贇’と改名する前の本名。字や号ではないから、索引に採録されず）。なお、下冊には各人に数字化（巻末「引用書目」参照）された室名等の典拠情報を附す。

F. 清代の人物

206『清人室名別称字号索引・増補本』 ※体裁は **201『明人室名別称字号索引』** 同様。上下冊とも巻末に「補編」（正編に漏れた分）を置く。室名等の典拠情報は示さない。

207『清人別名字号索引』 ※画数順配列、筆画・ウェード式ローマ字検字（巻首）付。別名字号を引けば、本名が分かる（他の情報は無い）。姓+異名の異名表（巻末）付。

208『清代碑伝文通検』 ※画数順配列、首字索引（巻首）、画数順異名表（画数）付。

209『清代人物生卒年表』 ※簡体字使用、画数順配列、姓氏首字索引（巻首）を附す。

208、209は姓名で引くとその生卒年、字号、籍貫（本籍）、情報の出処が示される。

以上が、清代の人物を調べる際に用いる主要な索引類である。例として本章本節 **A.** で清人と分かった「傅山」を **206** で検索すると、その下冊 666 頁にやはり籍貫が「陽曲」で、「青主」以外に「仁仲」や「青竹」という字が見え、文集の表題にある「霜紅龕」を含めて、実に 54 の号などが列挙される。一時期に全てを使ったとは限らないが、一人物が非常に多数の呼び名を用い、その事実が残った典型例といえよう。

G. 近現代の人物

『漢籍目録』37 頁左図版『逸塘詩存』本文第一葉表に「合肥王 揖唐」とある。同じ第一葉表に「葛西一八二三年生」の割注が見えるので『逸塘詩存』の著述はそれ以降、増録『今傳是樓主人年譜』（『漢籍目録』37 頁右）によれば撰者・王志洋（字は揖唐^{いつとう}）は「清光緒四年戊寅」（1878）に生まれたと分かる。従って、王揖唐は清末から、民国の人かと推測される。この時代の人物に関する情報は、以下のような文献より得られる。

211『中国文化界人物総鑑』 ※民国元年以降生存の文化人、画数順配列、字画索引付。収録人名 4000 以上。著者は **70『続修四庫全書総目提要』** の編纂や原稿の保存で活躍。同時代資料として貴重だが、当然ながら生存していた人物の没年を記さぬ憾みがある。

215『現代中国人物別称総覧』 ※民国元年以降の生存者、五十音配列、典拠一覧表、画順人物索引、画順別称索引等（巻末）付。別名・生没年月日、伝記資料を列挙。

216『中国近現代人物名号大辞典』 ※別名を挙げるだけでなく、経歴なども略述する。

211 の 45 頁上段、**215** の 11 頁双方の「王揖唐」条によると、彼は最初の名が「志洋」で、字の「揖唐」が名として通用し（所謂「以字行」、「字を以て^{おこな}行わる」）。『漢籍目録』62 頁参照）、「逸塘」や「今傳是樓主人」の別名を有したという。

H. 日本の漢学者

『漢籍目録』111 頁中段右図版『論語』封面

佩蘭清先生閱

東厓伊藤先生考訂 龍溪巖垣先生標記

論語集解

不許翻刻 千里必究 東都書林 千鍾堂藏版

日本で漢籍の刊刻・校訂と最も関係をもったのが、漢学者であることは、贅言を要すまい。日本人による漢籍受容の歴史は長いが、和刻本の全盛期は江戸時代といってよい。そこで、いささか特殊ながら、漢学者の人名録も時代別の人名事典として、本節で取り上げる。

222『漢学者伝記及著述集覧』

※江戸期から昭和九年まで、姓+号五十音順配列、名・字・号・書名別五十音順索引付。

225『漢文学者総覧』

※江戸期中心、姓+号五十音配列、名・号・通称・字・私諡五十音（音読み）、索引付。

このH. の冒頭で挙げた『論語』の封面に見える「東厓伊藤」の「伊藤」が日本人の姓であることは、いうまでもない。ここから、伊藤東厓（涯）を見て取るのは、難しくない。しかば、「龍溪巖垣」は巖（岩）垣龍溪という人物だと見当が付けられよう。この二人の名は、**222** の 52 頁上段、66 頁上段、**225** の 23 頁、38 頁に各々見え、検索も容易だ。

「佩蘭清」の方は、少し難しい。「東厓伊藤」と同形式だろうが、「清佩蘭」で漢学者の人名事典を調べても出てこない。改めて **222** の号索引、**225** の索引で「佩蘭」を引くと前者の 437 頁上段、後者の 265 頁に「伏原佩蘭」なる人物が見え、略歴と共に彼の本姓は「清原」だと記す。即ち、清原氏出身で『枕草子』を書いた女性を「清少納言」と呼ぶのと同様、漢学者だけあって、中国風に本姓を「清」の一字に縮めた（「^{しゅうせい}修姓」）わけだ。

ii. 別名の索引

既に各時代の項でも、別名から本名が分かる文献をいくつか挙げた。以下に掲げるのは時代を特定せず、なおかつ姓+名、姓+号の検索を想定しない別名索引である。

226『古今人物別名索引』 ※起筆別配列、筆画検字（巻末）、正編・続補遺から成る。

227『室名別号索引』 ※画数順配列、筆画・四角号碼検字（巻首）、正編・補編に二分。

宗室（王族）や高官は各種文中で爵位や諡のみ（時に姓や王朝、領地の名を冠する）で呼んだりする。これに関する検索が可能な専著もある。上記二書と同様、時代は限定しない。

231『歴代人物諡号封爵索引』 ※画数順配列、筆画検字を上下編冒頭に附す。

上編：諡号を引くと姓名・封爵が分かる。下編：その逆、姓名で諡号や封爵が検索可能。

『漢籍目録』61 頁下段右図版『六臣註文選』卷一第一葉表第二行「梁昭明太子撰」とある

231 の 72・73 頁「昭明」条に「【南朝梁】蕭統」とある。「昭明」と‘梁’（王朝名）の一致より「梁昭明太子」は蕭統を指すらしい（伝記によれば「昭明」は諡）と分かる。

iii. 分野別の人名録

文学者、芸術家など各分野に限定した人名事典も多数出版されている。前近代中国では、政治上の著名人とこれらが重なる場合が多く、各方面の事典にも目配りする必要がある。一々は言及しないが、仏僧の人名録たり得る文献を、例に挙げておこう。

233『釈氏疑年録』 ※時代順、末字（「僧祐」は「祐」、即ち 9 画で引く）筆画索引。

『漢籍目録』61 頁上段右図版『弘明集』卷一第一葉表第二行に「梁釋僧祐撰」とある。

233 の 32 頁「京師建初寺僧祐」の条を見ると、籍貫・俗姓・出典の他に、「梁天監十七年卒、年七十四（四四五―五一八）」とある。王朝名の‘梁’と僧名から考えて、『弘明集』の撰者とこの僧祐は同一人である。なお、法名（通常は二字）の末字で索引を並べるのは、上字を省いて、つまり「△×」という僧侶を「×（法）師」などと呼ぶ例も多いからだ。

iv. 非漢字文化圏の固有名詞索引

キリスト教宣教師の来訪など現在に続く西洋世界との接触が始まると、漢籍の中にも、西洋人の名前が現れるようになる。『漢籍目録』3 頁の図版（上段中『幾何原本』及び中段左『五緯表』）に見える「利瑪竇^{リマウ}」、「湯若望^{マウ}」等がそれだ。これらが Matteo Ricci（マテオ・リッチ）、Johann Adam Schall von Bell（シャル・フォン・ベル、乃至アダム・シャール）だと知るにはどうすればよいか。彼らほどの著名人ならば、「利瑪竇」等で（人名）事典を引けば出てこよう。だが、知名度が落ちる、もしくは本人が中国と特に関係無く中国人が便宜上、音訳した場合はそうはいくまい。ここでは特に書名を挙げないが、この種の固有名詞（地名を含む）専門の辞典もある。「漢籍整理参考資料」247～251 を参照されたい。

v. 年譜の手引

事典・索引の他に人物について知る著作として、年譜も見逃せない。個人（特定の集団が対象の場合もある）の事跡を、年次を逐って記す年譜は、中国では比較的早く発達した。現に新たな作品も著され続けている。やはり本文では例示しないが、年譜を利用する手引も複数存在する。それについては、「漢籍整理参考資料」IV. v. 252～257を見られたい。

V. 地名の検索（附・官名）

i. 地名の辞典：後の『孫子書』の例で具体的に見るが、地名検索上の難点が二つある。

①階層構造：「〇〇省△△府××県」は規模の差があるので同じ地点を指したことにはならないが、理論上「××」だけではなく「△△」とも呼び得る。

②当該の時代における地名ではなく古名で、あるいは正式な行政区劃名ではなく雅名で表現される場合が多い。

『漢籍目録』39 頁上段左図版『孫子書』卷上第一葉表第二、第三、第四行：

閩晉江虚舟趙本學解引類

德安府推官梁見孟校

衡州府推官周 著全校

「德安府」、「衡州府」は現代日本でも地方自治体を示す‘府’から地名と思しい。ここから、横に並ぶ「閩晉江^{びん}」も地名かと推測する。人名と異なり、古名が使われ続けることも多い地名では、時代別ではなく、全体を見通す文献が必要だ。さもなくば、時代A、Bに各々存在した行政区a、bが実は同じ地域を指す事実などが分からなくなろう。

古くから中国では、かかる地名の変遷を踏まえた地理書が編まれ続けた。258『読史方輿紀要』、259『大清一統志』（嘉慶重修一統志）しかり、小規模ながら 260『歴代沿革表』（同書のインデックス 261『中国郡邑雅名索引』は雅名の検索に便利）もそうだ。これらは純然たる漢籍そのものだが、地名の把握になお役立つ。関連の工具書として、次の文献もある。

262『読史方輿紀要索引支那歴代地名要覧』 ※五十音順配列（ただし歴史的仮名遣い）、字音（巻首）、字画（巻末）検字付。清代初期以前と民国十年の地名を対照できる。

263『中国古今地名大辞典』 ※画数順配列、筆画検字（巻首）、四角号碼索引（巻末）。初版時の「各県異名表」に加えて、二版以降は続編や附録などが補われている。

264『中国歴史地名大辞典』（原版『中国地名大辞典』）

※部首別画数順配列、部首一覧、筆画検字（巻首）、ウェード式ローマ字 INDEX（巻末）。

266『中国歴史地名大辞典』 ※簡体字、画数配列、筆画検字（巻首）・索引（各冊冒頭）。史書の記述に基づき、古地名を解説。比定される現代の地名は 1994 年末のそれに準拠。

先の「晉江」を調べてみよう。**262** の 305 頁上段・当該条に「福建省（厦門道）南安縣西北ヨリ東南晉江縣城南を經、東海ニ入ル」、また「晉江縣（唐以後）」の条に「福建省（厦門道）晉江縣」、両方に「福建泉州府晉江縣」という。即ち、河川の「晉江」にちなむ行政区名が「晉江縣」なのだ（**264** の 832 頁上段と欄外により詳しい説明がある）。

一方、残った「閩」はといえば、**263** の 1138 頁第二段に「【閩】五代十國之一。……◎福建者爲占七閩地。故簡稱福建省曰閩」とある。『孫子書』の撰者・趙本學は明代（1368～1644）の人物だ。遠い昔、福建一帯を支配した地方政權の閩（909～945）とは当然、縁もゆかりも無い。この「閩」は、福建の略称（「簡稱」、古来の別称でも可）と解されよう。

前章 i. E. の「明 温陵 李載贇 批點」という記載を思い起こされたい。そこに引いた人名事典は「李（載）贇」を「晉江人」と称していた。**266** の 2613 頁右「温陵」条には「福建泉州の別称」という。「温陵」とは「泉州」の別称を以て、その下部機構である「晉江縣」（泉州の中に晉江縣が存在する）を呼んだものだったのだ。

ii. 歴史地図類：ある地名の位置や各時代間で地名等がどう変化したかを確認できる。

272『中国歴史地図集』 ※簡体字・繁体字の両版あり、部首別画数地名索引（各冊末）。歴史上（清末まで）の地名がどこに位置するか調べるのに最適、時代ごとの 8 分冊構成。

明代の「晉江」県は第 7 冊の 70 頁に見え、福建省沿岸部に存在したと視認できる。

附・官名の解説

本来、官名は地名と全く異なるカテゴリーに属する。ただ、漢籍の書誌情報採取では本章 i. で挙げた『孫子書』巻頭に見える「德安府推官梁見孟校」のように「德安府」と「推官」などのように両者が連続して現れる記述に出会う場合が少なくない。

また、地名と同じく、官職も古名・雅名（別称）で呼ばれることが頻繁にある。更に、一人について、複数列挙（本書冒頭の劉備は「左將軍」と「豫州牧」の二つの官名を帯びていた）したりする例も、珍しくない。これらの類似点に鑑み、本章で併せて取り上げた次第だ。

さて、ここでは劉備の「豫州牧」、梁見孟の「推官」（‘官’字から官職だという可能性が疑われる）を見てみよう。日本語で中国の官職を解説した文献に、次の辞典がある。

274『中国歴代職官辞典』 ※常用漢字、官職を概ね官名（五十音）で配列。
歴代の官職（封爵）、その名称・起源・職務内容の変遷・員数・官等・別名を略述。

同書 160 頁に「【州牧】〈州伯〉〈州長〉〈方伯〉〈刺史〉〈牧〉 三代時代、州長官を称した。……漢代にもこの官がおかれた。すなわち武帝の時刺史、成帝の時牧、光武帝の時刺史、靈帝の時州牧と称した」、190 頁に「【推官】〈軍事推官〉 ……元、明代においては各府に推官一人をおき府の裁判業務に当らしめた。また清初この官がおかれたが、後に廃止された」とある。「〈 〉」内は、雅名や時代で変遷する官名（職務内容は類似）を表す。

これによって、劉備の「豫州牧」は「豫州」という行政区（州）の「(州) 牧」（長官）であり、梁見孟は「徳安府」の裁判を管掌する「推官」だと解釈される。‘牧’、‘推官」という官名に管轄地の地名「豫州」と「徳安府」を冠する点は、両者共に異ならない。

先述の如く、地名・官名は別称（古名・雅名。明確な区別は無いが）で呼ぶことも多い。従って、特定時期の名辞を含むにせよ、その著作・版本の年代も同じとは決められない。そこに留意しつつ、漢籍に記す撰者の籍貫が伝記と異なる、刊刻地の呼称が当時の行政区名でない時などは、複眼的に比較・考証し、実際の名称を把握せねばならない。

鈔刻とはある漢籍が書物としてこの世に生み出されるに際して、「いつ」「どこの」誰が「どこで」どうしたか、ということだ。二つの「どこ」や「いつ」を誤らぬためにも、地名・官名の検討には慎重さが必要となる。

VI. 鈔刻（出版事項）の知識

本章では、漢籍の鈔刻について、出版・版刻、紀年、年代の指標ともなる「避諱」及び「叢書」の四節に分けて論述を進める。まず、書肆も含む出版の主体を取り上げたい。

i. 出版・版刻

目録を繰っていて、個人名や姓氏（「×氏」）の他、「某々齋」といった室名の連なりに目を留めたことは、漢籍に関わる者ならば誰しにも共通の経験だろう。「何々軒刊本」などとある以上、「何々軒」はこの場合、出版の主体と思しい。室名等の検索法は、IV.で既に述べたところだ。ここでは、同じものを出版の側面から、より詳しく調べる方法を考える。

『漢籍目録』96 頁右図版『郡齋讀書志』封面

吳門汪氏刊行

郡齋讀書志

藝芸書舍藏版

「藏版」は書誌用語（『漢籍目録』106 頁）なので、この「^{げいいうん}藝芸書舍」は『郡齋讀書志』の版權に関わる存在と考える。このような組織・機関については、次の辞典が参考になる。

282『中国古籍版刻辞典』 ※簡体字、画数順配列、筆画語彙索引（巻首）付。

書誌・版刻関連語・書名、出版者・刻工名、書肆名などから成る見出し語に解説を附す。

282 当該の条によれば「藝芸書舍」は清の嘉慶年間における江蘇長洲の人・汪士鐘の室名だ。更に汪士鐘は蔵書を好んで、様々な書籍を刊刻したが、その中に『郡齋讀書志』二十巻もあったという。地名（「吳門」は「蘇州」の別称）と「汪」姓の一致も併せて、この『郡齋讀書志』は間違い無く同じ「藝芸書舍」の刊行物と確認される。

付言すれば、これは藝芸書舍が蔵書・刊刻で著名だから、簡単に情報が得られたものだ。現実には、この種の室名などは、索引類でそれを名乗る人物とその籍貫だけでも分かれば、満足すべき場合が多い。

『漢籍目録』111 頁中段左図版『論語』刊記（奥付）

天明三年癸卯五月

大坂

心齋橋筋安堂寺町
大野木市兵衛

江戸

日本橋通一丁目
須原屋茂兵衛

京都

柳馬場四條下町
同店

和刻本漢籍についても、同様の調査が必要となる。参照し得るのは、次の辞典等だ。

283『日本古典籍書誌学辞典』 ※常用漢字、五十音順、索引（巻末）付。

日本のみならず、中国の書誌・刊刻も含め叙述の範囲は幅広い。

さて「須原屋茂兵衛」を例に取ろう。**283**の328頁上段の記述に彼は「江戸最大の書物問屋。……家号は千鐘房。住所は日本橋通一丁目西側」云々とある。**IV. i. H.**で見た同じ『論語』の封面にも「東都書林 千鍾房藏版」とあった。住所（「東都」は江戸）、家号（「鐘」と「鍾」は通じる）からも、この『論語』は代々店主が「須原屋茂兵衛」を名乗った書肆の出版物と判断され、更なる情報が**283**より得られるわけだ。

本節では、出版の主体を調べる観点でのみ**282**、**283**の使用例を挙げてみた。両書はこの他に版刻用語等も広く採録しており、**I. ii. D.** 所掲書と共に、その面でも参考になる。

ii. 紀年（『漢籍目録』88～91頁参照）

鈔刻に関する「いつ」に当たる情報は封面、木記、序跋に見えることが多い。ただし、それらは単純に年月を記す以外に十干（甲乙丙丁……）十二支等を使う場合が少なくない。これを元号+数字(+年)、ひいては西暦と対照するには、下記の年表が最も便利だ。

286『東方年表』 ※帝王歴代一覧、年号索引（国別・五十音順）、干支表を巻末に付す西暦と干支、中国・東北・朝鮮（君主と元号）、日本（天皇と皇紀）を毎頁20年分表示。

前節に掲げた和刻本『論語』の刊記に「天明三年癸卯五月」とあった。**286**の年号索引を見ると、「天明」は日本で西暦1781～1789年の間に使われた元号、従ってこの「三年」は1783年となる。この場合、元号+数字+年と西暦年の変換は比較的容易だ。もしも「三年」が無ければ、どうか。その時は**286**本文で1781～1789年（天明年間）が見える個所（123頁）を開き、そこで「癸卯」に当たる年を探せば、それが「三年」（1783）だと分かる。

286より詳細に中国暦・西暦の対照が可能な文献、Web page（**IX.** 参照）も存在する。ただし、「（中国の太陰暦・元号）何年何月何日はグレゴリオ暦何年何月何日か」調べよと要請される場面はそう多くない。通常は日本や中国の紀年が手軽に（「天明三年」は清の乾隆四十八年などと）対照できる**286**を備えておけば十分だと思われる。

iii. 避諱（『漢籍目録』12・13頁参照。I. ii. 所掲書など版本学関連書も多く言及）

「避諱」の中でも皇帝やその祖先の諱が含む文字を避け、①別字・代用語や「廟諱」、
「今上御名」等の割注で代替し、また②最終の一面を書かない（「欠筆」）習慣は、漢
籍の鈔刻と特に関わる。例えば、書中の「弘」とあるべき文字が一律「宏」とされ、「寧」
は改めない（「甯」としない）ならば、その清刊本は乾隆帝（諱は「弘曆」）の即位（1735）
後、道光帝（諱は「^{びんねい}旻寧」）が皇帝となる（1820）前に刊刻されたと予想し得る。

つまり、ある王朝や各皇帝の治世下で使えない文字を覚えれば、それが鈔刻の時期を
知る目安となるわけだ。「避諱」関連の代表的もしくは近年の論著に次のようなものがある。

290『史諱举例』 ※1962年版以外にも様々な形式で出版、繁体字・簡体字版が併存。
近代における避諱研究の代表的業績、巻八で各時代における避諱の具体的な様相を論述。

291『史諱辞典』 ※拼音配列、筆画、四角号碼、拼音檢字（巻首）付。

避諱の結果である文字・熟語を掲げ、原因を解説（中国語）。まえがき（日本語）あり。

292『歴代避諱字匯典』 ※拼音順配列、拼音・四角号碼對照表、四角号碼索引（巻末）。
避けるべき文字を見出しに、それがどう処理されたか出版以外も含む広範な資料で例示。

IV. i. E. の「李（載）贇」という名を思い出していただきたい。そこでは省略したが、実は201下冊154頁に「……中舉後避諱、改為贇」と改名の理由が注記される。

290巻八「歷朝諱例」の第八十一「明諱例」条は明代の避諱を論じる。同条の中に、
皇帝「穆宗」（隆慶帝、在位1567～1702）の諱「^{さいこう}載_屋」（姓は朱）が見える。

李贇（1527～1602）の年代より見て、彼は穆宗の即位後、「贇」一字を名として、
それで通したものであろう。隆慶帝の治世自体は短かったが一旦、避けるべきとされた
文字は王朝の滅亡まで受け継がれる。明は避諱が緩やかな時代だったが、その社会的な
慣習は、やはり存続していた。李贇の改名は、そういった実状を示す好例である。

もっとも、そうだからといって「李載贇」の姓名が見える『精鏤合刻三国水滸全伝』
が李贇と改名する前に刊刻されたととは判断できない。現に、このテキストは明の末年、
彼の名を騙って出版されたと考えるのが通説だ。漢籍の年代比定は他の指標がある限り、
それを用いるべきであって、「避諱」はあくまでも補助的な手段に止まるだろう。

iv. 叢書（『漢籍目録』114～119 頁参照）

我々がある漢籍を見たいと思って、検索の結果、その単行本を手にとるということは、存外少ないと思われる。それよりは、むしろ叢書に入ったテキストを読む方が確率は高いであろう。本節で取り上げる「叢書」関連の工具書は、単行書の場合における解題・目録（Ⅲ.）に相当する。ただ、中国において叢書は南宋以降、大きく発達した出版の重要な一形態であり、その意味で鈔刻を扱う本章に組み入れることにした。

『漢籍目録』115 頁図版第二段右『平津館叢書』封面 第二段中同目録

平津館

叢書^{第一集}

蘭陵孫氏藏版

平津館叢書目録

甲集

周書六韜六卷附逸文一卷（後略）

『平津館叢書』全体の封面と目録の冒頭だ。「叢書」に関する工具書を次に列挙する。

293『中国叢書綜録』 ※筆画・拼音で文字の四角号碼が分かる索引（第3冊冒頭）付。

第1冊：各叢書名を引けばその所収書や書誌情報を示す。叢書名索引・検字（巻首）付。

第2冊：個別の漢籍を分類で配列。その漢籍がどの叢書に収められるか等の情報を示す。

第3冊：個別の漢籍とそれらの撰者等が第2冊のどこに見えるかを示す索引。

294『中国叢書綜録補正』 ※293未収叢書と子目を掲出、293所収叢書異名索引付。

295『中国叢書総録続編』 ※293や296とも重複あり、叢書名・所収書索引、検字付。

296『中國叢書廣録』 ※基本的に293未収の叢書が対象。

上冊：各叢書名を引けば所収書や書誌情報を示す。（叢）書名・撰者等索引・検字付。

下冊：個別の漢籍とそれらの撰者等が上冊のどこに見えるか示す。拼音・筆画検字付。

上掲の諸書で「叢書」について調べる、その必要が生じるのは、次のような時だろう。

①目当ての漢籍が手持ちの解題や目録に見えない（そもそも、手元に解題・目録が無い場合も含む）。

②手近な目録が叢書の含む個別の漢籍（子目）を書名・撰者名から、検索できる形を取らない。

③手に取っている漢籍が叢書中の一部（「離れ」）と思しいが、詳しいことが分からない。

仮に『六韜^{りくとう}』、それも逸文一卷を附す六巻本のテキストが読みたいとしよう。この時、293第3冊の索引でその書名を検索すると、16頁右に「六韜、逸文 768右 769左」

とある。そこで、第2冊の768頁右から769頁左を見ると、「六韜一卷」等、テキストごとに少しずつ異なる類似の書名が並んでいる。中の一つに「六韜六卷逸文一卷」とあり、同書を含む叢書が「平津館叢書（嘉慶本、光緒本）」を初め四種類挙げられる。

293は2797種に及ぶ叢書の情報をその中に盛り込む。概ね同書で事足りるのだが、そこに漏れた叢書が存在するのも、また事実だ。**294**、**295**、**296**はそれを補正する意味をもつ。

295の叢書子目書名索引の444頁左に「六韜 1012 1059 1206……」とある。これらの数字は同書が叢書に附した番号だ。多くは**293**にも見えるが、1206「昌平叢書」（日本の昌平坂学問所刊本に基づく）は含まれず、六卷本『六韜』を収める叢書の情報を補い得る。

また、**296**には別の利用法もある。上冊の叢書書名索引を見ると、その1076頁左に「平津館叢書 9501」という。「9501 叢書集成初編」条を開くと、1060頁左に「平津館叢書」と見える。つまり、『六韜』六卷本を含む「平津館叢書」が更に大部の叢書「叢書集成初編」に丸ごと収められているとういわけだ。この種の検索が可能なのは、**296**の持ち味だろう。

こうして、逸文一卷を附す『六韜』六卷本を含む叢書が分かった後、どう行動すべきか。前掲①の場合、『六韜』という漢籍の概略を知るのが目的ならば、「平津館叢書」本などのテキストの存在を知り得たことで、まずその一端は達成できた。この上は、それらの叢書名を手掛かりとして、実際に『六韜』を探せばよい。これは、②についても同じだ。

さて、③の場合である。「平津館叢書」第一冊は叢書中の一篇『六韜』を収めると共に、本節の最初に挙げた封面と目録をも含む。これらを見る限り、『六韜』は「平津館叢書」の一部らしいが、それはいかなる叢書で「蘭陵孫氏」とは何者かという疑問が湧いてくる。

先ほどは**293**等で子目からそれを収める叢書を見つける過程を紹介した。ここで必要となるのは叢書名（総目）による検索だ。**293**第1冊の叢書書名索引1142頁左に、「平津館叢書 148、……」とある。実際に148頁左を開くと、「平津館叢書（清）孫星衍輯 清嘉慶中蘭陵孫氏刊本 清光緒十一年（1885）吳縣朱氏槐廬家塾刊本 六韜六卷附逸文一卷（周）呂望撰（清）孫星衍校 逸文（清）孫同元輯 嘉慶十年（1805）刊」という記述が見え、続いてこの叢書が収める『六韜』以外の子目を、やはり書誌情報と共に列挙する。

ここから分かることは、第一に「平津館叢書」には嘉慶中刊本と光緒十一年刊本の二

種類がある点、第二に前者は「嘉慶中」というように全体が一度に出版されたわけではなく、中でも『六韜』は同十年の刊刻である点、そして第三に叢書の編者（各書の一つに‘^{あつ}輯’めた人物）の姓名が「^{そんせいなん}孫星衍」という点だ。「蘭陵孫氏」と彼との関係には、いま立ち入らない。本書で述べ来たった事柄より、読者はそれを解明する手立てを複数見出されよう。

全国漢籍データベース（IX. 参照）の拡充により、いながらにして多数の機関が蔵する漢籍の検索が可能な今日、目録・解題と同様、これら叢書に関する文献の利用価値も従前に比べて、低くなったかと思われる。ただ、それにしても稀見書も含め、簡略な形ながら、かくも多数の書誌情報を一望の下に見渡せる著作は他にあるまい。そこには、叢書が漢籍流通の主要な形式だったという事情が大きく関わる。効率よく情報を収集するという意味で、これらの工具書は、解題・目録やデータベース等と、なお併せ用いる必要があろう。

Ⅶ. 資料の読解と研究法

i. 字書と一般語彙の辞典

漢籍整理の際、（概ね古典語の）序文や跋文から、必要な情報を読み取らなければならない。多くの場合、我々は自らそれらの文章に句読を施すことになる（「0. 「工具書」以前」を参照）。ほぼ全ての図書所蔵機関が 49『大漢和辞典』（Ⅱ. iii. に既出）は備えておられるだろう。現在、古典文の読解で、それらと共に最も頻用されるのが、次の辞典だ。

305『漢語大詞典』 ※筆画部首順配列、筆画・拼音検字（別巻「附録・索引」）付。この種の辞典中、最大規模。原則的に固有名詞は採録せず、刷次により内容に差がある。

306『多功能漢語大詞典索引』、307『漢語大詞典詞目音序索引』

いずれも、**305**に収める熟語を文字の画数や拼音で検索できるようにした語彙索引。

本書冒頭で見た劉備の肩書きに「皇叔」というものがあった。**305**別巻の索引で‘皇’を筆画（9画）か拼音（huáng）で検索すれば、第8巻255頁に同字の項が存すると分かる。そこを開いた後、熟語が第二字の画数順に並んでいるのをたどっていく。かくして、同巻258頁右に「【皇叔】 皇帝的叔父」とあり、各種文献での用例がそれに続く

のが見つかる。

なお、**306**や**307**を使えば、すぐ第8巻258頁に「皇叔」の見えることが分かる。ちなみに**49**『大漢和辞典』で同じ言葉を引くと、第8巻75頁第四段に「天子の叔父」とあり、使用例が続くのも**305**と等しい。こうして「皇叔」とは皇帝の叔父だということを確認め得る（もっとも劉備がこの称号を帯びた史実は無く、これ自体がフィクションなのだが）。

これらの他、古典漢文の文法書・語彙集も多数存在する。中には白話（冒頭の『三国志演義』や『西遊記』の文章）、公文書、仏典、医書に特化したものもある。みなそれぞれに有用だが、他書の紹介に譲って、挙例は省略する。もちろん、そこに見える文法知識は不可欠である。ただ、これらの論著はその性格上、大部分が例文に句読、日本人向けであれば訓点を施す。

しかし、我々が目にするのは、大半が返点や送仮名はおろか、句読点すら無い全くの白文だ。それを読み解くには、文法知識を駆使しつつも、辞書と首っ引きで熟語同士の関係を確認めていかざるを得ない。初めは言葉の切れ目を探すのにも骨折るだろうが、読解力とは結局、この地道な作業を通じて得た‘勘’なのである。

ii. 研究入門・ガイドブック

程度は様々だが、概説書は各領域に存在する。その著述目的は、初学者に研究の状況を伝えることだ。ただ、これらは関係文献（原典資料や近現代の研究）・人物の解説にも力を注ぐ。この意味で分野別の事典と同様、それらは（索引があればなおさら）解題・人名録の側面をもつともいえよう。中国史・アジア史全体の研究入門を、その例として次に挙げる。

319『アジア歴史研究入門』 ※別巻に書名索引、人名索引（五十音順）を含む。

第Ⅰ～Ⅲ冊が中国及び朝鮮を対象とする。第Ⅰ、Ⅱ冊は時代別、第Ⅲ冊は分野別で研究史を概説、多くの章に資料解説やそれに類した項を立てる。第Ⅲ冊に12「目録学」を収める。

320『中国史研究入門』 ※各冊末尾に史籍索引（書名五十音順）、下冊末に附録あり。各章で時代ごとに研究史の展望を記す。上冊冒頭の総説及び各章の最初で研究書・文献、同じく最後で史籍を解説する。増補改訂時に追加した記述は上下各冊の末尾に置く。

321『中国歴史研究入門』 ※巻末に第Ⅰ部各章の文献一覧（著者名五十音順）を附す。第Ⅰ部の各章は時代別に研究史の概説と展望、史資料の解説から成る。冒頭の「序説」や第Ⅱ部「中国歴史研究のために」にも漢籍資料を扱う上で役立つ知識が盛り込まれる。

iii. 工具書使用法等

Ⅱ. i. にもそれ専門ではないが、工具書の使用法に紙幅を割く論著を挙げておいた。この方面の専著は、中国では多いのだが、情報はすぐ古くなるし、また当面の我々には不要な分野の知識まで大量に含む著作が少なくない。ここでは、日本書（中国語の原書に説明を追加）一件と中国書二件を掲出する。特に最初の一冊は便利である。

333『中国学レファレンス事典』 ※領域で分類、書名索引（画数順）を巻末に附す。実際に直面する疑問の解決法を Q&A 式で説明、訳者によるアドバイス・付録も有益。

335『文史哲工具書簡介』 ※簡体字、領域（地名・人物等）で分類、筆画書名索引付。

336『文史工具書詞典』 ※簡体字、領域（字典・書目等）で分類、筆画書名索引付。

前者は工具書や調査法を解説、後者はどのような工具書があるか、その特徴を説明。

VIII. その他の文献

本章では、前章までに取り上げなかった文献に言及する。具体的な論著名は、「漢籍整理参考資料」に就いて見られたい。以下、その採録状況によって、紹介に代えさせてもらう。

i. 書誌学者の著作集成

当然、書誌情報採取について、教えられるところが多い。日本人の先学お二方による業績の集成を挙げた。

ii. 蔵書印（『漢籍目録』104・105 頁参照）・刻工名

漢籍の中にしばしば見えるのが、印記と刻工の名だ。前者は出版者や題字の揮毫者が捺す（時には署名も残す）例もあるが、一般には所蔵者やその本を目睹した人物による

場合が多い。後者は刊刻に携わった刻工（日本でいう「彫り師」）の名が（版木、中でも板心や序・跋の余白などに彫られて）残ったものだ。

刻工名は他書に見られる同じ名との対照で刊刻地・時期を、封面・序跋・目次・巻頭等に残る印影は所蔵者を示す貴重な指標なる。**I. ii.** や**VI. i.** 所掲書が紙数を費やし、目録類もその存在を注記するなどしており、これらは漢籍の研究で一分野を形作る。

蔵書印の文字は概ね篆書（判読法は**II. ii.** 参照。偏旁を省略したりもする）で、印文は多く名や字・号・室名乃至それらを含む。従って、**IV. i. E.**、**F.**、**G.** や**IV. ii.** で挙げた人名事典類を用いて、その印記が誰のものか割り出すのも一つの手手段だ。

また、蔵書印の内容から持ち主を示す専著も存在する。「漢籍整理参考資料」には、その種の著作と宋元明清四代の刻工名リスト各一種（採録対象は共に中国人のみ）を挙げておいた。

iii. 研究論著索引

研究論著の索引（時に論文の影印を含む）も数多い。巻末の「漢籍整理参考資料」では中国学のうちでも人文・社会科学に重点を置き、比較的近年までの状況をカバーする単行本や索引の欄があり現に続く逐次刊行物等を探ってみた。

IX. コンピュータの利用

文献を扱った前章までとは趣きを変えて、本章では中国学研究上のコンピュータ利用について、ごく簡略に述べておく。筆者自身、その適性を全く欠く上に、日進月歩ともいべきこの分野では新知見もすぐに古びてしまうのだが、まずは手引となる論著を挙げよう。

360『電腦中国学』 ※序章、第1～4章と附録等から成る。第2章がWeb pageの紹介。

361『電腦中国学 II』 ※第3章「メールとインターネット」が検索法を扱う。

362『漢字文献情報処理研究』 ※360、361と同じ編者が両書の間に創刊した年刊誌。

中国学にも多大の便宜をもたらす新技術については、全てこれらを初めとした専門書等に委ねたい。巻末「漢籍整理参考資料」には、原則として無料で中国学関連の検索が可能な、またそれらの存在や各種情報を紹介したWeb pageをできるだけ広い範囲から60件挙げた。もとより偏向は免れ難い。各サイト自ら開設の意図・使用法を述べるの

で、説明はほぼ省略し、その中の少許を次に掲げるに止める。

全国漢籍データベース ※日本の各図書館が所蔵する漢籍の総合目録として構築中。

<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki/>

台湾・中央研究院・漢籍電子文献 ※古典文献電子テキスト検索システム、Big5 仕様。

<http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/handy1/>

東洋学学術サーチ漢風・Kanhoo! ※東洋学連情報の集成、電子テキスト検索システム。

<http://www.jaet.gr.jp/kanhoo/>

台湾・中央研究院・両千年中西暦転換 ※陰暦と陽暦の変換システム (VI. ii. 参照)。

<http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/sinocal/luso.html>

中国書籍販売店データベース ※日本国内における中国語圏関連書籍取扱店の情報。

<http://www.shuiren.org/books/index-j.html>

誰もが経験することなので、今さらいうまでも無いが、インターネット上の検索にも独自の限界が存する。「漢籍電子文献」で『三国志』中における劉備の登場個所を探すでしょう。それは「劉備」という姓+名の形で現れるとは限らない。

字の「玄德」や名の「備」だけで見える場合が非常に多いのだ。さりとて、「備」の一字で検索すれば、同字を含む別の名詞や「そなえる」という意味の動詞までがヒットしてしまう。

かかる欠点は現在急速に改善されつつある。しかし、現時点では検索サイトを使うにせよ、やはり人間が資料を読解して「(劉) 備」、「玄德」など指すところが同じ言葉を一個所に集めて見出しを立てた索引 (この例ではIV. i. A. の 188) 類と併用する方が、より望ましいかと思われる。

附章 字体と漢字配列 (検字) 法

およそ漢字には、様々な字体がある。現在、主に使われているのは、形が複雑な順に繁体字 (主な使用地は台湾)、日本の常用漢字、中国大陸の簡体字ということになる。

このうち、繁体字と日本で嘗て用いた正字・旧字は多く重なるようで、一概に同じだとはいえない。いわゆる略字と常用漢字も同様だ。これは、手書きや印刷だけの問題ではない。

台湾の文字コード Big5 限定の検索サイトで「刘备」と入力しても、コンピュータは一切反応しない。やはり「劉備」（繁体字、この場合は常用漢字も同じ）とする必要がある。

更に、字体が異なれば画数にも差が出てくる。部首でいうと、常用漢字・簡体字の‘++’、即ちクサカムリは3画だが、繁体字‘++’だと4画になる。この他にも、面倒な例がある。

例えば、オオザトは‘陳’と‘陈’で形は等しい。だが、他の字体で3画と数えるこれも簡体字では2画となる。従って‘陳’、‘陈’の総画数は各々11、7となる。また、‘楊’の簡体字‘杨’の総画に至っては「易」を簡略化した部分（日本人は5画に数えがち）が3画なので7画になる。加えて、それらは常に一対一の対応とも限らない。「乾燥」、「幹部」の‘乾’、‘幹’が簡体字だと‘干’一種に収斂するのが、その例である（『漢籍目録』12頁）。

これらは実地の経験を通して、暗記するように心掛けねばならない。そうでないと、次に触れる（総画・部首による）漢字の検索、ひいては文章の読解自体にも支障を来すだろう。

漢字の配列（検字）で従来、使われた基準に字形による総画、部首、起筆、四角号碼、中国字^{きけつ}度攝、字音によるウェード式、注音符号、拼音文字、日本漢字音がある。度攝法は燕京大学図書館の引得シリーズ（『漢籍整理参考資料』の**61、193、197、199、205、246**等）を除いて、まず例は無い。ウェード式はもう一般的でもない。これらを用いた索引も、多く他の配列法との対照表を載せる。注音符号は、台湾以外で普及しているとはいいい難い。

起筆法は第一画（時には第二画も。もっとも確定した筆順などあるまいが）を一（横棒）、丨（縦棒）、丿（払い）、丶（点）、乙（屈曲）等の各種に分けて漢字を分類する。ただし、これだけでは大量の文字を処理できないので、普通は総画索引と併用される。また拼音も中国語辞典を備えていれば、問題無い。総画・部首、日本漢字音は、我々にも馴染み深い。

日本人と縁は薄いだが、今後も使用され続けるのは、四角号碼だけと見られる。本文でもしばしば名を挙げたこの形式は、筆画の形状を10種に分類してそれぞれを数値化し、

漢字の四隅をこれで表して、四桁（乃至五桁）の数字に置き換え、文字をその順に配列したものである。

時代により、これにも若干の変化が見られる。日本で手早くこの配列法を知るには、**49『大漢和辞典』** 索引巻 1038～1031 頁、**335『中国学レファレンス事典』** 54～56 頁が便利だ。

どの筆形が四角号碼では何番に当たるか、覚えるに越したことは無い。しかし、多くの索引が筆画検字表を備えており、画数で四角号碼番号を知ることが可能だ（使用する索引に無い時は、他書のそれを使えばよい）。字体や配列法など些細なようだが、実は工具書の使用において軽視し得ぬ事柄である旨、平素から心掛けておきたい。

I. 目錄學・版本學の基礎知識－全體の參考書

- 1 『漢籍目錄－カードのとりかた 京都大學人文科學研究所漢籍目錄カード作成要領』
京都大學人文科學研究所附屬漢字情報研究センター編 京都・朋友書店 2005

i. 目錄學關連論著

- 2 『漢文研究法』狩野直喜 東京・みすず書房 1979
京都帝國大學第5回夏季講演會における講演（1914年8月1-6日）。中國の書物を有効に利用し、理解するための手段である目錄書・類書など工具書の使い方を説く。表題作の他、「經史子概要」は詩・書・易・三禮・春秋を解説し、參考書を挙げる。索引あり。
- 3 「支那目錄學」(『内藤湖南全集』12)内藤虎次郎 東京・筑摩書房 1970
もと講義録(1926年)、前漢の劉向から清の章學誠に至る目錄學史を論じる。附録二篇。
- 4 「支那學研究法 第三 目錄學」(『武内義雄全集』9)武内義雄 東京・角川書店 1979
目錄學とは何かからはじまって、正史の目錄、目錄の重點である分類・解題、さらにそれらに基づく文獻批判から興った校勘學、校勘學により價值が認識されるに至った古典舊版の影印にまで説きおよび、中國學における目錄學の重要性を明らかにする。
- 5 『目錄學』(東洋學文獻センター叢刊 20)倉石武四郎 東京・東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター 1973
「著者は、恩師内藤湖南氏の「支那目錄學」(『内藤湖南全集』第十二卷所收)の大綱によりつつも、その缺落を補ない、『漢書・藝文志』から『四庫全書總目提要』に至る、中國における學術發達史の骨格ともみられる“目錄學”の全體像をみごとに浮き彫りにしている。中國における類似の書物といえども、必ずしもこれほど明快に論述されてはおらず、著者の透徹した見識が隨處に窺われる名講義といえよう」(澤谷昭次「參考文獻案内」同氏譯『漢籍版本入門』付録)。卷末に索引を附す。1979年、汲古書院が再版。
- 6 「東方文化研究所漢籍分類目錄解説」(『東方學報』京都 14-1)倉田淳之助 1943
『東方文化研究所漢籍分類目錄』(Ⅲ-142)の分類・著録の仕方など、この目錄を利用する上で重要な事項を解説。
- 7 「四部分類の傳統」(『東洋史研究』8-4)倉田淳之助 1943
「七略」から『東方文化研究所漢籍分類目錄』(Ⅲ-142)までの分類の變遷の概略。

- 8 「中國文獻學大綱」(『吉川幸次郎遺稿集』1) 吉川幸次郎 東京・筑摩書房 1995
經部、史部のみ。「(2)「支那文獻學大綱」より後の口述筆記であることは確かであるが、この筆記者は明らかでない。…内容の違いは、(2) が、…『東方文化研究所漢籍目録』(この増補版が『京都大學人文科學研究所漢籍目録』)の解説の形式を採用しているのに対して、…その方向は踏襲しながらも、中國學術史という方向へ改めようとされていることがうかがわれる」(布目潮風「吉川幸次郎遺稿集第一卷解説」)。
- 9 「支那文獻學大綱」(『吉川幸次郎遺稿集』1) 吉川幸次郎 東京・筑摩書房 1995
「經史子集四部にわたる文獻」について述べたもの。「私がしっかりした東洋文庫の漢籍目録の編集ができるように、『東方文化研究所漢籍目録』の經部に始まり、史部、子部、集部と順を追って、その漢籍についての解説を一九四五昭和二十年末から口述されたものである」(布目潮風「吉川幸次郎遺稿集第一卷解説」)。
- 10 『知の座標 中國目録學』井波陵一 東京・白帝社 2003
- 11 『中國目録學』清水茂 東京・筑摩書房 1991
『世界古典文學全集』月報連載の文章(1966～69)に関連論文五篇を加えて單行本化。著者自身が「書籍における經濟性とそれに伴う技術の發展が、目録學にどのような関連を持ったかを軸に書いてみようと考えた」(あとがき)というように、單なる學術發展史としての目録學ではなく、各時代における書物の形態や出版状況との関わりにも目を向けている。
- 12 「目録學」(『アジア歴史研究入門』3) 勝村哲也 京都・同朋舎出版 1983
- 13 『中國目録學史』姚名達 長沙・商務印書館 1938
敘論篇、溯源篇、分類篇、體質篇、校讎篇、史志篇、宗教目録篇、專科目録篇、特殊目録篇、結論篇から成る。「内容的にやや繁雜で、全體としてのまとまりを缺く嫌いがある」(澤谷昭次「參考文獻案内」同氏譯『漢籍版本入門』付録)。1957 年臺灣商務印書館、2002 年上海古籍出版社蓬萊閣叢書、2005 年同世紀文庫に收録。『民國叢書』(第 1 篇 47) 版あり。
- 14 『中國目録學年表』姚名達 長沙・商務印書館 1940
「一貫した編年體の記述の展開によって、自らなる中國學術發達史の概要を知らしめるべく巧みに選擇された史實の繁簡よろしきを得たもので、この方面に志すものの座右必備の參考書といえよう」(澤谷昭次「參考文獻案内」同氏譯『漢籍版本入門』付録)。1967 年に臺灣商務印書館が、1978 年に成文出版社が影印。『民國叢書』(第 1 篇 47) 版あり。
- 15 『目録學』(國學小叢書)姚名達 上海・商務印書館 1934
13、14 と併せて本書を影印した『民國叢書』第 1 篇 47 (上海書店、1989 年) もある。

- 16 『目錄學發微』余嘉錫 北京・中華書局 1963
もと 1930～48 年の講義録。「目錄書における著録の體例の分析と歴代の代表的目錄に關する基本資料の集成においてすぐれて」いる（澤谷昭次「參考文獻案内」同氏譯『漢籍版本入門』付録）。1991 年巴蜀書社の補訂版や 2001 年上海古籍出版社版など版本多數。
- 17 『古書通例－中國文獻學入門』余嘉錫、古勝隆一等譯注 東京・平凡社 2008
〔原著：『古書通例』1985 年、上海・上海古籍出版社〕もと 1930 年代の講義録。中國古典文獻を読む上で役立つ知識に富む。譯注者による「中國文獻學用語集」も有用。
- 18 『中國目錄學史論叢』王重民 北京・中華書局 1984
中國目錄學の概説と、『千頃堂書目』などに關する論考を含む。
- 19 『古典目錄學淺説』來新夏 北京・中華書局 1981
「「概説」「古典目錄學著作と目錄學者たち」「古典目錄學の關係學科（分類學・版本學・校勘學各概説）」のそれぞれについて、小冊子ながら比較的丁寧な説明を施した好著である」（澤谷昭次「參考文獻案内」同氏譯『漢籍版本入門』付録）。
- 20 『古典目錄學』來新夏 北京・中華書局 1991
- 21 『目錄學概論』武漢大學北京大學《目錄學概論》編寫組編 北京・中華書局 1982

ii. 版本學關連論著（含圖録）

A. 中國書對象

- 22 『書林清話』（三次修改本）葉德輝 南陽・觀古堂 1920
1990 年上海書店版（『民國叢書』第 2 篇 50）、1998 年遼寧教育出版社版は附録がある。
- 23 「和漢書の印刷とその歴史」（『長澤規矩也著作集』2 所収）長澤規矩也 東京・汲古書院 1982
1952 年吉川弘文館版、1956 年同増訂版。増訂版、著作集（別卷）の索引で書名が検索可能。
- 24 『漢籍版本入門』陳國慶、澤谷昭次譯 東京・研文出版 1984
〔原著：『古籍版本淺説』1957 年、瀋陽・遼寧人民出版社〕「本書は、簡明かつ系統的に、中國における木版印刷と活字印刷の歴史・版本の區別・とりきめ・呼び方について紹介し、その裝丁技術や形式・名稱等々にいたるまで、漢籍の優れた諸特徴を解明したものである」（「譯者あとがき」に引く原著卷頭「内容簡介」）。刷次によって「參考文獻追補」等を附す。

25 『漢籍版本のてびき』魏隱儒・王金雨、波多野太郎・矢島美都子譯

東京・東方書店 1987

〔原著：『古籍版本鑑定叢談』1984年、北京・印刷工業出版社〕版刻史、版本の類型・用語、鑑定の方法と注意すべき問題、用紙、活字本の鑑定、批校・抄本の鑑定、偽本の鑑定について解説。「専門家の業務マニュアルにもなる」（巻首・慕湘「序」）。附録及び事項索引あり。

26 『圖說中國印刷史』米山寅太郎

東京・汲古書院 2005

27 『圖書學參考圖録』Ⅰ～Ⅴ 長澤規矩也

東京・汲古書院 1973～77

全5輯で書影520點を収め、各輯に別冊で解説を附す。対象は主に和刻本と近世活字印本。この他に「圖書學參考圖録入門篇」Ⅰ～Ⅲとして同じ著者の『圖解圖書學』（1974年）、『圖解古書目錄法』（1974年）、『圖解和漢印刷史』（1976年）を汲古書院が刊行。

28 『新修恭仁山莊善本書影』杏雨書屋編

大阪・武田科學振興財團 1985

29 『靜嘉堂文庫宋元版圖録』靜嘉堂文庫編

東京・靜嘉堂文庫 1992

圖版篇、解題篇各1冊。いずれも巻末に書名索引、後者は加えて刻者姓名索引等を附す。

30 『中國版刻圖録増訂本』北京圖書館編

北京・文物出版社 1961

1960年版を増訂。1983年京都・朋友書店によるリプリントがあり、増訂本に基づく。

B. 和本対象

31 『書誌學談義 江戸の板本』中野三敏

東京・岩波書店 1995

32 『和本入門 千年生きる書物の世界』橋口侯之介

東京・平凡社 2005

C. 朝鮮本対象

33 『圖說 韓國の古書 本の歴史』安春根、文嬾珠譯

東京・日本エディタースクール出版部 2006

34 『韓國七〇〇年美術大系 國寶卷12 書藝・典籍』千恵鳳編、孔泰瑤譯

東京・竹書房 1985

朝鮮時代以前に作られた典籍の圖版をカラーで約300點、モノクロで約120點収載する。

35 『韓國文化財大觀 8 寶物6 書畫・典籍』韓國文化財保護協會編、李石珩譯

ソウル・大學堂 1991

書畫を除いて典籍（朝鮮の善本）133點の圖版を収載する。巻末にそれらの解説を附す。

D. 圖書學・書誌學辭典

- 36 『圖書學辭典』長澤規矩也 東京・三省堂 1979
1991 年汲古書院版あり。和漢書誌學の基本的用語約 1700 を収録、索引は五十音順。
- 37 『日本書誌學用語辭典』川瀬一馬 東京・雄松堂書店 1982

II. 漢籍の概略把握

i. 整理・目録法

- 38 『書誌學序説』長澤規矩也 東京・吉川弘文館 1974
1960、1968 年の兩版に續いて刊行。版本學の他、目録學關連の記述も冒頭に見える。
- 39 『漢籍整理法』長澤規矩也 東京・汲古書院 1974
- 40 『新編和漢古書分類法』長澤規矩也 東京・汲古書院 1980
1962 年版（出版者：長澤規矩也）、1972 年汲古書院版あり。「新編」の語は本書で附加。
- 41 『新編和漢古書目録法』長澤規矩也 東京・汲古書院 1975
1960 年初版、「増訂」と題する刷次あり。内容は隨時増補、「新編」の語は後者で附加。
- 42 『中國圖書整理入門－和泉新教授の講義から－』（『圖書館を考える』4）
國際基督教大學圖書館編 三鷹・國際基督教大學圖書館 1988
講義録。實地の書誌情報採取、カード記述が話題の中心だが、目録學の知識も多く含む。
- 43 『校讎廣義』程千帆・徐有富 濟南・齊魯書社 1988～98
版本・校勘・目録・典藏の四編から成る。『程千帆全集』1～4（河北教育出版社、2000 年）に再録。
- 44 『漢籍－整理と研究』
- a. 「Q&A 工具書の活用と校合の必要性」（『漢籍』誌 3）長谷川久子・高橋良政 1993
 - b. 「Q&A 集部の分類と工具書」（同 4）安達勉・高橋良政 1994
 - c. 「漢籍整理での工具書 その一」（同 5）柳秀子 1995
 - d. 「漢籍整理での工具書 その二」（同 6）柳秀子 1996
 - e. 「Q&A 漢籍整理での工具書 その三」（同 7）安達勉・柳秀子 1997
 - f. 「漢籍整理と工具書の活用」（同 10）編集部 2001
- 45 『中國古典を読む はじめの一步－これだけは知っておきたい』坂出祥伸

ii. 書體字典

- 46 『五體字類』(改訂第三版) 高田竹山監修、法書會編輯部編 東京・西東書房 2001
47 『書道大字典』伏見冲敬編 東京・角川書店 1974
48 『行草大字典』赤井清美編 東京・東京堂出版 1982

iii. 辭典・事典類

- 49 『大漢和辭典』(修訂版) I～XII・索引 諸橋轍次、鎌田正・米山寅太郎修訂
東京・大修館書店 1984～86
50 『大漢和辞典 語彙索引』東洋學術研究所編 東京・大修館書店 1990
49 に収める熟語について、49 での所在巻数・頁を表示。語彙は五十音順に配列。
51 『大漢和辞典』補巻 鎌田正・米山寅太郎編 東京・大修館書店 2000
本編に比べて親文字 800 餘、熟語 3300 餘を補う。巻首に字音索引、巻末に語彙索引を附す。
52 『アジア歴史事典』I～X・別巻 平凡社編 東京・平凡社 1959～62
五十音順、第 10 巻は索引、別巻『アジア歴史地圖』(V-271)。1984 年新装復刊版あり。
53 『中國學藝大事典』近藤春雄 東京・大修館書店 1978
54 『新編東洋史辭典』 京都大學東洋史辭典編纂會編 東京・東京創元社 1980
1961、1967 年版の後身。廣く東洋史関連の約 6000 項目を収録。付録と索引がある。

III. 書名による調査—解題と目録

i. 解題

A. 全般型の解題

- 55 『四庫全書總目提要』乾隆四十七年敕撰(紀昀等)
中華書局影印本(1965、1981)は四庫撤燬書、同未收書目提要、書名・著者名索引を附す。

- 56 『四庫全書總目提要敘譯注』土曜談話會四庫全書總目敘編集委員會編
東京・土曜談話會 1972・73
『四庫全書總目提要』各部の總敘及び各類の敘の全てに譯注を施す。經史子集の4分冊。
- 57 『四庫提要譯注』土曜談話會編 東京・土曜談話會 1966・67
『四庫全書總目提要』のうち16件の提要に譯注を加える。經史子集各1冊の計4冊。
- 58 『四庫全書總目提要唐詩集の研究』近藤光男 東京・研文出版 1984
唐詩別集29種、唐詩總集16種の提要に譯注を施す。各譯注の前に版本等の情報を示す。
- 59 『四庫提要北宋五十家研究』笈文生・野村鮎子 東京・汲古書院 2000
北宋の文學者50家56種の別集に附された提要の譯注。卷末に書名索引・人名索引あり。
- 60 『四庫提要南宋五十家研究』笈文生・野村鮎子 東京・汲古書院 2006
南宋の詩人53家57種の詩集に附された提要の譯注。卷末に書名索引・人名索引を附す。
- 61 『四庫全書總目及未收書目引得』
魏魯男 (James Roland Ware)・燕京大學圖書館引得編纂處編
北平・燕京大學圖書館 1932
- 62 『四庫提要辨證』余嘉錫 北京・科學出版社 1958
1980年中華書局版、2004年雲南人民出版社二十世紀學術要籍重刊版は舊版を修訂。
- 63 『四庫全書總目提要補正』胡玉縉、王欣夫輯、中華書局上海編輯所編
上海・中華書局 1964
表題の書以外に『四庫全書總目提要補正補遺』、『四庫未收書目提要補正』を収める。卷末に四角號碼書名索引、筆劃順序檢字が見える。1998年、上海書店出版社が再版。
- 64 『四庫全書簡明目錄』乾隆四十七年敕撰 (于敏中等)
1985年上海古籍出版社版は1964年版を修訂の上、卷末に索引があつて、利用に便利。
- 65 『增訂四庫全書簡明目錄標注』邵懿辰撰、邵章續錄 北京・中華書局 1959
1979年、2000年にいずれも上海古籍出版社が、それぞれ舊版に修訂を施して刊行。
- 66 『販書偶記』孫殿起 上海・上海古籍出版社 1982
卷末に四角號碼を用いた書名・著者名索引を附す。1959年中華書局版に修訂を施す。
- 67 『販書偶記續編』孫殿起 上海・上海古籍出版社 1980
66、67は著者が數十年の経験で得た情報に基づき、主に清代の著作と辛亥革命以後1935年くらいまでの四部分類で分類できる内容の書物を著録する。『四庫全書總目』に見える書物を収めず、單刻本だけを収めるので、『四庫全書總目』を補足する役割を果たす。
- 68 『『販書偶記』正續編合併刊行目錄』(東洋學文獻センター叢刊別輯20)
東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター編

東京・東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター 1995

66、67 に記載されている出版社・出版者・出版地等の刊行事項に関する総合的な索引。

通常は書名等で引く同類の索引中では例外的。四角號碼配列、巻首に檢字表を附す。

69 『續修四庫全書提要』(稿本) 橋川時雄等編 北平・油印本 1931~36

70 『續修四庫全書提要』橋川時雄等編 臺北・臺灣商務印書館 1972

全 13 冊。最終冊は全體が、四角號碼を用いた「續修四庫全書提要書名索引」から成る。

71 『續修四庫全書總目提要(稿本)』中國科學院圖書館整理 濟南・齊魯書社 1996

全 37 冊。他に索引卷(分類索引、書名筆畫順索引、作者筆畫順索引から成る)がある。

72 「支那學入門書略解(新訂補修版)」(『長澤規矩也著作集』9 所収) 長澤規矩也

東京・汲古書院 1985

1930、31、34、40、48 年の文求堂書店版あり。中國學各分野の基本書等について詳説。

B. 特化型の解題

○史籍

73 『中國史籍解題辭典』神田信夫・山根幸夫編

東京・燎原書店 1989

史籍という限定はあるものの、内容・構成を解説、叢書の概要等にも觸れており、有用。

○地方志

74 『中國地方志總錄 增訂本』朱士嘉編

上海・商務印書館 1958

省別配列、地方志の書誌情報を示し、巻末に書名索引あり。1968 年東京・大安が影印。

75 『中國地方志聯合目錄』中國科學院北京天文臺主編

北京・中華書局 1985

76 『中國地方志總目提要』金恩輝・胡述兆主編

臺北・漢美圖書 1996・2002

最後の 1 冊は 1949~99 年、前 3 冊はそれ以前の地方志が対象。各々の末尾に索引あり。

77 『中國地方誌連合目錄』東洋學文獻センター連絡協議會編

東京・東洋文庫 1965

東洋文庫、東京大學東洋文化研究所、京都大學人文科學研究所、内閣文庫藏の中國地方志を索引化。卷數・纂修者・編刊年等を記す。省別配列、巻末に畫數順書名索引あり。

78 『日本主要圖書館・研究所所藏中國地方志總合目錄』

國立國會圖書館參考書誌部アジア・アフリカ課編

東京・國立國會圖書館參考書誌部 1969

国内 14 機関の中國地方志所藏状況を列挙。省別配列、卷末に書名通檢（五十音）あり。

- 79 『新編日本現存明代地方志目録』山根幸夫編 東京・汲古書院 1995
山根幸夫・細野浩二編『増補日本現存明代地方志目録』（東洋文庫明代史研究室、1971 年）を更に増補。国内諸機関所藏の明代地方志を列挙。省別配列、五十音書名索引あり。

□子部書

- 80 『周秦漢魏諸子知見書目』嚴靈峯編 北京・中華書局 1993
1975～78 年正中書局版を増訂。漢魏以前の諸子と六朝の主要な子部書関連文献を列挙。

□藝術家（書論・書法）

- 81 『中國書學論著提要』陳滯冬 成都・成都出版社 1990
書法関連著作 551 種を列挙してそれぞれ解説、中國・日本の關係論著目録を卷末に附す。

□醫家（醫學書）

- 82 『中國醫學書目』黒田源次・岡西爲人編 奉天・滿洲醫科大學中國醫學研究室 1931
滿洲醫科大學中國醫學研究室所藏の中國醫學関連書を列挙。卷末に畫數書名索引を附す。
83 『續中國醫學書目』岡西爲人編 奉天・滿洲醫科大學中國醫學研究室 1941
82 未收書 1060 種を列挙。卷末に書名索引を附す。82 と共に 1971 年文海出版社版あり。
84 『中國中醫古籍總目』薛清録主編 上海・上海辭書出版社 2007
1949 年以前の中國醫學書 12124 種を列挙し、版本や所藏機關の情報を記す。索引あり。
85 『宋以前醫籍考』岡西爲人編 北京・人民衛生出版社 1958
1860 種以上の醫學書を解説、卷末に索引あり。1969 年臺北・進學書局版と異同がある。

□釋家（佛典・佛書）

- 86 『大藏經全解説大事典』鎌田茂雄等編 東京・雄山閣出版 1998
『大正新脩大藏經』のうち圖像部等を除く第 85 卷まで（高楠順次郎編、大正一切經刊行會、1923～32 年）に収める全典籍の解題。大正藏の収録順に佛典等を配列・解説。他に「主要著者・譯者解説」などの付編 3 篇を加え、卷末に「全典籍索引」を附す。

□道家（道經經典・道書）

- 87 『道藏提要』（第三修訂）任繼愈主編 北京・中國社會科學出版社 2005
道教經典の全集「道藏」に収める文獻の解題。卷末に撰者紹介・索引、書名索引を附す。

□別集（歴代）

- 88 『中國歴代詩文別集聯合目錄』王民信主編 臺北・聯經出版事業 1981～85
清代までの別集を列挙。時代順・撰者別に配列、最終冊末尾に人名（撰者）索引を附す。

□別集（宋代）

- 89 『日本現存宋人文集目錄』（改訂版）吉田寅・棚田直彦 東京・吉田寅 1972
別集の書誌情報・所藏を著者（姓名の五十音配列）ごとに示す。卷末に書名索引を附す。
90 『現存宋人別集版本目錄』四川大學古籍整理研究所編 成都・巴蜀書社 1990
宋人 741 名の現存する別集の情報（所藏等を含む）を列挙。類書に比べて見やすい。

□別集（金・元代）

- 91 『日本現存元人文集目錄』山根幸夫・小川尚編 浦和・山根幸夫 1970
別集の書誌情報・所藏を著者（姓名五十音順、金人も含む）ごとに示す。書名索引あり。
92 『元人文集版本目錄』（南京大學學報叢刊）周清澍編 南京・南京大學 1983
元人の文集 300 種近くを撰者ごとにまとめ、時代順に配列して、書誌情報を列挙する。

□別集（明代）

- 93 『増訂日本現存明人文集目錄』山根幸夫編 東京・東京女子大學東洋史研究室 1978
別集の書誌情報・所藏を著者（五十音順）ごとに示す。書名索引、叢書所在目錄あり。

□別集（清代）

- 94 『日本現存清人文集目録』西村元照編 京都・東洋史研究會 1972
書誌情報・所蔵を著者（五十音順）別に示す。書名、著者名（筆畫、表音）各索引あり。
- 95 『清人文集別録』張舜徽 北京・中華書局 1963
1980 年版、1982 年臺北・明文書局版、2004 年武漢・華中師範大學出版社版もある。
- 96 『清人詩集敍録』袁行雲 北京・文化藝術出版社 1994
- 97 『清人別集總目』李靈年・楊忠主編 合肥・安徽教育出版社 2000
- 98 『清人詩文集總目提要』柯逢春 北京・北京古籍出版社 2002

□白話小説

- 99 『中國通俗小説書目』孫楷第 北京・人民文學出版社 1982
1933 年の中華大辭典編纂處・國立北平圖書館版、1957 年の作家出版社版に續く修訂本。
- 100 『中國通俗小説總目提要』江蘇省社會科學院明清小説研究中心・文學研究所編
北京・中國文聯出版 1991
各種通俗小説の篇目を載せ解説。卷末に通檢・索引を附す。1990 年版を一部修訂。
- 101 『増補中国通俗小説書目』大塚秀高編 東京・汲古書院 1987
99 を擴充した通俗小説の版本・日本での所蔵等の詳細な目録。卷末に拼音書名索引を附す。ただし、單獨の研究も多い四大奇書や『儒林外史』と『紅樓夢』は対象から除外。
- 102 『新編清末民初小説目録』樽本照雄編 大津・清末小説研究會 1997
主に 1902～18 年、雑誌や單行本に發表された小説の目録。配列は作品名の拼音順、卷末に著譯編者索引（拼音順）を附す。翻譯・翻案作品の典據を示すなど利用價值は高い。
- 103 『新編増補清末民初小説目録』樽本照雄編 濟南・齊魯書社 2002
102 に約 3100 條を追加し、項目數は 19000 條に達する。102 同様、表記は概ね日本語。

○和刻本

- 104 『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』長澤規矩也 東京・汲古書院 2006

○朝鮮本

- 105 『日本現存朝鮮本研究 集部』藤本幸夫 京都・京都大學學術出版會 2006
隨筆・雜著も対象に含む。朝鮮本研究參考文獻一覽、書名索引、撰者・編者索引を附す。

ii. 目録

A. 史書に収める目録等

- 106 『漢書藝文志』班固撰、顔師古注
『漢書藝文志』（上海・商務印書館、1955 年）は書名・人名索引（四角號碼）を附す。
- 107 『隋書經籍志』長孫無忌等撰
『隋書經籍志』（上海・商務印書館、1955 年）は書名・人名索引（四角號碼）を附す。
- 108 『隋書經籍志詳攷』興膳宏・川合康三 東京・汲古書院 1995
107 の譯注書。卷末に書名索引・人名（撰者など）索引（いずれも五十音順）を附す。
- 109 『唐書經籍藝文合志』劉昫・歐陽脩等撰 上海・商務印書館 1956
- 110 『宋史藝文志 宋史藝文志補 宋史藝文志附編』脱脱等撰
上海・商務印書館 1957
- 111 『遼金元藝文志』黃虞稷等撰 北京・商務印書館 1958
- 112 『明史藝文志 明史藝文志補 明史藝文志附編』張廷玉等撰
北京・商務印書館 1959
- 113 『重修清史藝文志』彭國棟 臺北・臺灣商務印書館 1968
- 114 『清史稿藝文志及補編附索引』章鈺等撰 北京・中華書局 1982
- 115 『清史稿藝文史拾遺』王紹曾主編 北京・中華書局 2000
全 3 冊、うち 1 冊は索引（程遠芬編）で書名、著者兩索引（共に四角號碼順）から成る。
- 116 『文獻通考・經籍考』馬端臨撰、華東師範大學古籍研究所標校
上海・華東師範大學出版社 1985
- 117 『四庫經籍提要索引』國立中央圖書館編 臺北・國立中央圖書館 1994
政書（文獻通考等）や四庫提要や續編が著録する典籍の書名（上册）・人名索引（下册）。

B. 簡人の目録

- 118 『郡齋讀書志校證』晁公武撰、孫猛校證 上海・上海古籍出版社 1990
- 119 『直齋書錄解題』陳振孫撰、徐小蠻・顧美華點校 上海・上海古籍出版社 1987
- 120 『千頃堂書目』黃虞稷撰、瞿鳳起・潘景鄭整理 上海・上海古籍出版社 1990
2001 年版は卷末の四角號碼を用いた「千頃堂書目索引」で、書名・著者名が検索可能。

- 121 『千頃堂書目著者名索引』東洋文庫明代史研究委員會編 東京・東洋文庫 1996
- 122 『藏園訂補邵亭知見傳本書目』莫友芝撰、傅增湘訂補、傅熹年整理
北京・中華書局 1993
- 123 『古籍版本題記索引』羅偉國・胡平編 上海・上海書店 1991
- 102 種の書目類を対象に、古籍に関するコメントがそれらのどこに見えるかを索引化。

C. 公的機関の目録

□國內

- 124 『東北大學所藏和漢書古典分類目録』東北大學附屬圖書館編
仙臺・東北大學附屬圖書館 1974～80
漢籍部分全3冊以外に、和書部分全4冊(1976～82)から成る(共にうち1冊は索引)。
- 125 『圖書寮漢籍善本書目』宮内省圖書寮編 東京・宮内省圖書寮 1930
宮内省圖書寮版の他、東京・文求堂書店、松雲堂書店による複製(1931年)がある。
- 126 『尊經閣文庫漢籍分類目録』尊經閣文庫編 東京・尊經閣文庫 1934・35
目録と索引各1冊から成る。1998年のゆまに書房による復刻版は目録2冊と索引1冊。
- 127 『國立國會圖書館漢籍目録』『國立國會圖書館漢籍目録索引』
國立國會圖書館圖書部編 東京・國立國會圖書館 1987・95
- 128 『靜嘉堂文庫漢籍分類目録』靜嘉堂文庫編 東京・靜嘉堂文庫 1930
- 129 『靜嘉堂文庫漢籍分類目録續』國立國會圖書館支部靜嘉堂文庫編
東京・國立國會圖書館管理部 1951
- 130 『東京大學總合圖書館漢籍目録』東京大學總合圖書館編
東京・東京大學總合圖書館 1995
卷末に「書名索引」(五十音順)を附す。東京堂出版發行する場合あり。別冊に「東京大學總合圖書館漢籍目録檢字表正誤表竝補遺」(東京大學總合圖書館、1998年)がある。
- 131 『東京大學總合圖書館準漢籍目録』山本仁編 東京・東京堂出版 2008
準漢籍940點、それに準ずるもの554點を著録。関連論文、書名索引(五十音順)あり。
- 132 『東京大學東洋文化研究所漢籍分類目録』東京大學東洋文化研究所編
東京・東京大學東洋文化研究所 1973・75
本編と書名人索引各1冊から成る。1981年汲古書院による縮刷本(合冊訂正)あり。
- 133 『東京大學東洋文化研究所現代中國書分類目録』東京大學東洋文化研究所編

- 東京・東京大學東洋文化研究所 1996
- 本文と索引（書名・著者名索引）各 1 冊から成る。内山書店刊行となっている場合あり。
- 134 『改訂内閣文庫漢籍分類目録』内閣文庫編 東京・内閣文庫 1971
- 135 『東洋文庫所藏漢籍分類目録 經部』東洋文庫編 東京・東洋文庫 1978
- 136 『東洋文庫所藏漢籍分類目録 史部』東洋文庫編 東京・東洋文庫 1986
- 137 『東洋文庫所藏漢籍分類目録 子部』東洋文庫圖書部編 東京・東洋文庫 1993
- 138 『漢籍分類目録 集部 東洋文庫之部』東洋學文獻センター連絡協議會編
東京・東洋文庫 1967
- 139 『増補東洋文庫漢籍叢書分類目録』東洋文庫編 東京・東洋文庫 1965
- 140 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』名古屋市蓬左文庫編
名古屋・名古屋市教育委員會 1975
- 141 『東方文化學院京都研究所漢籍目録』東方文化學院京都研究所編
京都・東方文化學院京都研究所 1938
- 142 『東方文化研究所漢籍分類目録』東方文化研究所編 京都・東方文化研究所 1943
- 『東方文化學院京都研究所漢籍目録』を承けて、叢書に收められている各書を經史子集の四部にすべて分類し、附録の一つとして書名通檢を收めた」（布目潮風「吉川幸次郎遺稿集第一卷解説」）。上册は目録本文、下册は書名・人名（撰者名）通檢（畫數順）。
- 143 『京都大學人文科學研究所漢籍分類目録』京都大學人文科學研究所編
京都・京都大學人文科學研究所 1963・65
- 全 2 冊、下册は書名・人名通檢（畫數順）。人文科學研究協會發行とされる場合がある。
- 144 『京都大學人文科學研究所漢籍目録』京都大學人文科學研究所編
京都・京都大學人文科學研究所 1979・80
- 下册は書名・人名通檢（畫數順）。1981 年の縮印版は京都・人文科學研究協會發行。
- 145 『京都大學文學部漢籍分類目録 第一』京都大學文學部編
京都・京都大學文學部 1959
- 146 『京都大學漢籍綜合目録（集部）稿』高木正一等編
京都・京都大學文學部中國語學中國文學研究室 1966
- 147 『大阪府立圖書館藏漢籍目録』大阪府立圖書館編
大阪・大阪府立圖書館 1964～67
- 148 『懷德堂文庫圖書目録』大阪大學文學部編 豐中・大阪大學文學部 1976
- 149 『吉川文庫漢籍目録』神戸市立中央圖書館編
神戸・神戸市立中央圖書館 1985・87

全2冊、古書の部（清末までの書籍）と「新學部」から成る。各々巻末に書名通檢あり。

- 150 『日本九州大學文學部書庫漢籍目錄』周彥文編 臺北・文史哲出版社 1995

□國外

- 151 『北京圖書館古籍善本書目』北京圖書館編 北京・書目文獻出版社 1987

- 152 『北京圖書館普通古籍總目』北京圖書館普通古籍組編
北京・書目文獻出版社 1990～

部門別、各冊に書名・著者名索引（四角號碼）あり。1、4、6、10、13巻の後、國家圖書館普通古籍組編『國家圖書館普通古籍總目』5（國家圖書館出版社、2008年）を刊行。

- 153 『上海圖書館善本書目』上海圖書館編 上海・上海圖書館 1957

- 154 『國立中央圖書館善本書目 增訂本』國立中央圖書館編
北・國立中央圖書館 1967

- 155 『國立中央圖書館・國立臺灣師範大學・私立東海大學普通本線裝書目』
國立中央圖書館・國立臺灣師範大學圖書館・私立東海大學圖書館編
臺北・國立中央圖書館、國立臺灣師範大學、私立東海大學 1971

- 156 『國立故宮博物院善本舊籍總目』國立故宮博物院編 臺北・國立故宮博物院 1983

- 157 『國立故宮博物院普通舊籍目錄』國立故宮博物院編 臺北・國立故宮博物院 1970

D. 所藏機關・所藏者を限定しない目録

- 158 『中國古籍善本書目』中國古籍善本書目編輯委員會編
上海・上海古籍出版社 1989～96

1989・90年に東京・中華書店が刊行した經部・叢部の影印本は索引を全面的に改編。これらや帙入線裝本以外に上海古籍出版社が刊行した精裝本（1989～98年）もある。

- 159 『稿本中國古籍善本書目書名索引』天津圖書館編 濟南・齊魯書社 2003

- 160 『中國古籍善本總目』翁連溪編 北京・線裝書局 2005
『中國古籍善本書目』（158）を大幅に改訂、全7冊、第7冊は書名索引（四角號碼配列）。

- 161 『增訂中國訪書志』阿部隆一 東京・汲古書院 1983
著者が調査した臺灣・香港の諸機關が現に所藏する善本の解説集、巻首に書名索引あり。

- 162 『中國善本書提要』王重民 上海・上海古籍出版社 1983
著者が調査した4400餘種に及ぶ善本の提要、巻末に書名や關連人物・書肆名索引あり。

- 163 『中國善本書提要補編』王重民 北京・書目文獻出版社 1991
 162 刊行後に発見された著者による善本の提要、史部 770 餘篇、子部 10 篇近くを集成。
 164 『日藏漢籍善本書録』嚴紹璁編 北京・中華書局 2007
 日本に藏せられる主に明代以前の刊本・鈔本等の書誌情報を記述、卷末に書名索引あり。

E. 目録の集成

- 165 『書目叢編』(初編至五編)王道榮輯 臺北・廣文書局 1967~72
 100 種に及ぶ古今の書目類を集成して影印。所收書目の解説が各編冒頭の序に見える。
 166 『書目類編』嚴靈峯編 臺北・成文出版社 1978
 全 117 冊、書目類の集成、原本の影印である點は 165 に同じ。分野別・時代順に配列。
 167 『明代書目題跋叢刊』馮惠民等編 北京・書目文獻出版社 1994
 168 『清人書目題跋叢刊』 北京・中華書局 1990~
 169 『中國著名藏書家書目匯刊』林夕主編 北京・商務印書館 2005
 明清卷 30 冊、近代卷 40 冊から成る。著名な藏書家の書目類 150 種以上を影印・收録。
 170 『日本書目大成』I~IV 長澤規矩也・阿部隆一編 東京・汲古書院 1979
 第 4 卷に収める官板(江戸幕府の命による出版物)関連書を初め、有益な目録等を影印。

F. 目録の目録

- 171 「支那書籍解題 書目書誌之部」(『長澤規矩也著作集』9 所收)長澤規矩也
 東京・汲古書院 1985
 もと文求堂書店が 1940 年に出版。「中國書目書誌關係の主要著作六〇〇點餘りを、(一) 史志、(二) 郡邑志、(三) 官藏、(四) 圖書館・學校、(五) 家藏、(六) 勸學、(七) 讀書題跋、(八) 專家目、(九) 著述目、(十) 版刻、(十一) 禁燬目、(十二) 徵訪徵刻、(十三) 叢書目、(十四) 引書目、(十五) 書誌學、(十六) 叢刻、(十七) 雜書、(十八) 附載の一八部門に分け、それぞれの部門に屬する主要著作をほぼ遺漏なくとりあげ、各種テキスト間の異同についてはもとより、目次および内容の概要を紹介し、著者独自の判斷による按語を附したものである」(澤谷昭次「參考文獻案内」同氏譯『漢籍版本入門』付録)。
 172 『増訂日本における漢籍の蒐集—漢籍關係目録集成—』
 東洋文庫東洋學インフォメーションセンター編 東京・汲古書院 1982

舊版の約 2600 種に加え、1980 年 3 月以前に作成された漢籍関係目録約 500 種を著録。

173 「本邦漢籍目録書目」(『中國文學報』68) 山口謠司 2004

174 「本邦漢籍目録圖録及び解題編書目 附 本邦漢籍目録書目補遺並びに追加」
(『中國文學報』70) 山口謠司 2005

175 『中國歷代書目總録』梁子涵編 臺北・中華文化出版事業委員會 1953

176 「歷代書目叢刊目録」(《中國典籍與文化》編輯部編『中國典籍與文化論叢』10)
來新夏編 北京・北京大學出版社 2008

@書名參考書

177 『同書異名彙録』杜信孚・王劍編 南京・江蘇古籍出版社 2000

各書の別名を列記。杜信孚『同書異名通檢(増訂本)』(江蘇人民出版社、1982 年)を増補。

178 『古書同名異稱舉要』張雪庵 濟南・山東人民出版社 1980

拼音順配列、同じ書名の下で異なる漢籍を列挙、別名から正式な書名が各々検索可能。

179 『同名異書彙録』杜信孚等編 南京・江蘇古籍出版社 2000

同名異書 3500 條を列記(177 の逆)、卷數・著者・版本等を略述。書名の畫數順に配列。

IV. 人名の検索

i. 全般型の人名索引

A. 廣範圍、隋代以前の人物

180 『中國人名大辭典』臧勵齋等編 上海・商務印書館 1921

清末までの人物 40000 人強を収録。卷末の「異名表」は字・號の他、幅廣く別名を採録。

181 『中國人名大詞典・歷史人物卷』廖蓋隆等主編 上海・上海辭書出版社 1990

182 『中國歷代人名大辭典』張撝之等主編 上海・上海古籍出版社 1999

辛亥革命以前の人物約 54500 人を収録、解説を施す。卷末に四角號碼順の人名索引あり。

183 「歷代人物年里碑傳綜表」(『姜亮夫全集』19) 姜亮夫 昆明・雲南人民出版社 2002
孔子から近代まで 8000 人餘りの人物が対象。もと『歷代名人年里碑傳綜表』(現書名は 1959 年中華書局版から)。中華書局版で削された「帝王表」、「高僧表」が全集版で復活。

- 184 『歷代名人生卒年表』梁廷燦編、陶容等補 香港・中美圖書 1969
- 185 『二十五史人名索引』二十五史刊行委員會 上海・開明書店 1935
「二十四史」(188 参照)と『新元史』の本紀・世家・列傳・載記に傳記のある人物について、それが開明書店版「二十五史」何頁第何欄にあるかと各正史の卷數を記す。配列は四角號碼順、筆畫索引を附す。1956 年中華書局版、1965 年臺北・開明書店版あり。
- 186 『二十五史紀傳人名索引』上海古籍出版社・上海書店編 上海・上海古籍出版社、上海・上海書店 1990
「紀傳」とは本紀と列傳のこと。上海古籍出版社・上海書店版、中華書局版標點本「二十四史」(188 参照)と『清史稿』について皇帝は本紀、他は列傳と傳記の所在を示す。
- 187 『二十四史紀傳人名索引』張忱石・吳樹平編 北京・中華書局 1980
「二十四史」(188 参照)の本紀・世家・列傳・載記に傳記のある人物について、その所在を中華書局版標點本に即して卷・冊・頁を記す。四角號碼配列、筆畫檢字表を附す。
- 188 『二十四史人名索引』中華書局編輯部編 北京・中華書局 1998
『史記人名索引』(中華書局、1977 年)など「二十四史」(『史記』『漢書』『後漢書』『三國志』『晉書』『宋書』『南齊書』『梁書』『陳書』『魏書』『北齊書』『周書』『隋書』『南史』『北史』『舊唐書』『新唐書』『舊五代史』『新五代史』『宋史』『遼史』『金史』『元史』『明史』)それぞれの本文に出てくる人名が第何卷、標點本の第何冊何頁に見えるかを記す。
- 189 『四庫全書傳記資料索引』中華文化復興運動推行委員會四庫全書索引編纂小組編 臺北・臺灣商務印書館 1990・91
「四庫全書索引叢刊」の一種。人物ごとに「四庫全書」のどこに傳記が見えるかを明示。姓名の畫數順に配列、本編 2 冊の他、字號索引(別名から本名が検索可能)1 冊を附す。
- 190 『古今同姓名大辭典』彭作楨編 北平・好望書店 1936
畫數順に姓名を配列、同姓同名の各人物について履歷を記述。1983 年上海書店版あり。

B. 唐・五代の人物

- 191 『唐五代人物傳記資料綜合索引』傅璇琮等編 北京・中華書局 1982
83 種の書籍に見える唐五代の人物約 30000 人の傳記的記述の記載場所(第何冊何卷何葉・頁)を記す。書名は數値に置き換えて表示し、卷末に筆畫と四角號碼の對照表あり。

C. 宋代の人物

192 『宋人傳記索引』宋史提要編纂協力委員會編 東京・東洋文庫 1968
宋人及び遼・金朝支配下の漢人約 8000 人の傳記が文集などのどこに見えるかを索引化。

193 『四十七種宋代傳記綜合引得』燕京大學圖書館引得編纂處
北平・哈佛燕京學社 1939

宋人の傳記資料に関する書籍 47 種を対象に傳記の所在を記したもの。字號索引と姓名索引があり、索引の配列には中國字度攝法が用いられているが、筆畫索引が附されており、中國字度攝法が分からなくても使える。1959 年東方學研究日本委員會版等もある。

194 『宋人傳記資料索引』（増訂再版）昌彼得等編 臺北・鼎文書局 1980～86
505 種の典籍、その他の資料に見える宋人約 22000 人に關する傳記資料の所在を列挙。

195 『宋人傳記資料索引補編』李國玲編 成都・四川大學出版社 1994
1000 餘種の典籍等で 194 を補う。新收人物 14000 餘人、記事を修訂した人物 6000 人。

D. 遼・金・元代の人物

196 『遼金元人傳記索引』梅原郁・衣川強編 京都・京都大學人文科學研究所 1972
遼・金・元の人物約 3200 人の傳記が主に同時代の文集 130 種のどこに見えるかを明示。

197 『遼金元傳記三十種綜合引得』燕京大學圖書館引得編纂處
北平・哈佛燕京學社 1940

遼・金・元人の傳記資料に関する書籍 30 種を対象に傳記の所在を記したもの。體例及び筆畫檢字が附される點等は 193 に同じ。1960 年東方學研究日本委員會版等もある。

198 『元人傳記資料索引』王德毅等編 臺北・新文豐出版 1979～82
700 餘種の典籍等から元人 16000 餘人の傳記事實を抽出、關連資料の所在を列挙する。

E. 明代の人物

199 『八十九種明代傳記綜合引得』田繼綜編、燕京大學圖書館引得編纂處校訂
北平・哈佛燕京學社 1935

明人の資料に関する書籍 89 種を対象に傳記の所在を記す。體例などは 193 に同じ。

200 『明人傳記資料索引』國立中央圖書館編 臺北・國立中央圖書館 1965～66

201 『明人室名別稱字號索引』楊廷福・楊同甫編 上海・上海古籍出版社 2002

202 『明人別名字號索引』王德毅編 臺北・新文豐出版 2000

203 『日本現存明代地方志傳記索引稿』山根幸夫編 東京・東洋文庫 1964

- 204 『中日現藏三百種明代地方志傳記索引』 臺北・大化書局 1986
203 は日本現存の明代地方志に見える傳記の所在を人物ごとに明示。204 はそれに改編。

F. 清代の人物

- 205 『三十三種清代傳記綜合引得』杜連喆・房兆楹、燕京大學圖書館引得編纂處校訂
北平・燕京大學圖書館 1932
清人の傳記資料に関する書籍 33 種を対象に傳記の所在を記す。體例等は 193 に同じ。
再印本に 1960 年東方學研究日本委員會版等がある。
- 206 『清人室名別稱字號索引（増補本）』楊廷福・楊同甫編
上海・上海古籍出版社 2001
1988 年版を増補・修訂。收録人物約 40000 名、收録する別名などは 110000 件以上。
- 207 『清人別名字號索引』王德毅編 臺北・新文豐出版 1985
- 208 『清代碑傳文通檢』陳乃乾編 北京・中華書局 1959
清人に關する傳記の所在を人物でまとめ、姓名の畫數順に配列する。採録文獻は 1025 種、卷末に「異名表」（諱が対象）等の附録が見える。2003 年北京圖書館出版社版あり。
『清人別集碑傳文引得及碑傳主年里譜』（中國文化學院、1965 年）はこれに基づく。
- 209 『清代人物生卒年表』江慶柏編 北京・人民文學出版社 2005
- 210 『清史稿紀表傳人名索引』何英芳編 北京・中華書局 1996
『清史稿』（中華書局、1976・77 年）本紀・表・列傳に見える人名の索引。四角號碼順。

G. 近現代の人物

- 211 『中國文化界人物總鑑』橋川時雄 北京・中華法令編印館 1940
收録人物の寫眞（白黒）を附す場合がある。1982 年、名著普及會により覆刻。
- 212 『近代中國人名辭典』山田辰雄編 東京・霞山會 1995
1840～1949 年に活動した人物中心（約 1100 名）、拼音配列。總畫・五十音で檢索可能。
- 213 『中國近現代人名大辭典』李盛平主編 北京・中國國際廣播出版社 1989
1840 年～1988 年 9 月に没した近現代の著名人 10750 名を姓名畫數順配列、履歷を解説。
- 214 『民國人物大辭典（増訂本）』徐友春主編 石家莊・河北人民出版社 2007
- 215 『現代中國人物別稱總覽』藤田正典編 東京・汲古書院 1986
- 216 『中國近現代人物名號大辭典（全編増訂本）』陳玉堂編

杭州・浙江古籍出版社 2005

1840 年以降の著名人が対象。一般的な呼称で配列、別名を典拠と共に列挙。索引あり。

217 「近現代中國人合傳類索引」「同 (2)」「同 (3)」「同 (4)」

(『近代中國研究彙報』6-8、17)

1984~95

162 種の文獻に見える近現代の著名人に關する傳記の所在を各人ごと五十音順に索引化。

218 「中國近現代人物工具書解題 1978-1990 刊」(『近代中國研究彙報』13)

市古宙三

1991

中國の近現代史上に活躍した人物(複數)の傳記調査に便利な中國出版文獻を解説。

219 『中國近代人物傳記資料索引』(中華叢書國立中央圖書館目錄叢刊第 12 輯)

國立中央圖書館主編

臺北・中華叢書編審委員會 1973

1840 年以降の人物 1588 人について各資料から傳記の所在を列挙、卷末に著者索引あり。

220 『中國近現代人物傳記資料索引(1840-1949)』王繼祥主編

長春・東北師範大學圖書館 1988

10000 餘人の著名人について 24000 餘條の傳記資料を列挙。拼音配列、檢字表を附す。

221 『辛亥以來人物傳記資料索引』復旦大學歷史系資料室編

上海・上海辭書出版社 1990

1985 年以前に中國大陸で刊行された文獻 80000 件から、18000 名の傳記資料を列挙。

H. 日本の漢學者

222 『漢學者傳記集成』竹林貫一編

東京・關書院 1928

1969 年、名著刊行會の複製あり。江戸期の漢學者 381 名の傳記、卷末に氏號索引あり。

223 『漢學者傳記及著述集覽』小川貫道編

東京・關書院 1935

1970 年、名著刊行會の複製あり。日本の漢學者 1256 人の履歷と著作 14800 餘を列挙。

224 『近世漢學者傳記著作大事典 附系譜年表』關儀一郎・關義直編

東京・井田書店 1943

1619~1937 に没した漢學者約 2900 名の著述を列挙、撰者の略傳を附す。『近世漢學者著述目錄大成』(東洋圖書刊行會、1941 年)に「雅號索引」、「近世漢學年表」を増補。

225 『漢文學者總覽』長澤規矩也監修、長澤孝三編

東京・汲古書院 1979

ii. 別名の索引

226 『古今人物別名索引』（嶺南大學圖書館叢書）陳德芸編

廣州・嶺南大學圖書館 1937

筆畫の種類（横直線など）で配列。諡・官爵にちなむものを含め、別名・字・號・書齋名等 70000 項目餘りを収録、各々から本名が検索可能。室名と別號の後に各人の籍貫を記す。1965 年臺北・藝文印書館、1978 年新文豐出版、1985 年長春市古籍書店が再版。

227 『室名別號索引（増訂本）』陳乃乾編、丁寧等補

北京・中華書局 1982

収録項目 34000 餘（字は除外）。同名・同時代の人物に關してのみ識別のために本籍を注記。

228 『歷代名人室名別號索引（増訂本）』池秀雲編

太原・山西古籍出版社 1998

歷代の著名人 13796 名の室名・別號を畫數で配列、本名と履歷を記す。本名の索引あり。

229 『古代名人字號辭典』白曉朗・馬建農主編

北京・中國書店 1996

拼音配列で別名（綽名の類を含む）から姓名が検索可能、卷末に人名（本名）索引あり。

230 『著者別號書錄考』杜信孚・蔡鴻源編

南京・江蘇古籍出版社 2000

1986 年版を改訂。著作に題された人物の別名でその本名が検索可能。収録項目 1200 餘。

231 『歷代人物諡號封爵索引』楊震方・水賚佑編

上海・上海古籍出版社 1996

iii. 分野別の人名録

○佛教關連の人物

232 『東洋佛教人名事典』齋藤昭俊・李載昌編

東京・新人物往來社 1989

中國（約 400 名）の他、インド・チベット・モンゴル・朝鮮の佛教者約 1000 人を收載。

233 『釋氏疑年録』陳垣

北京・中華書局 1964

晉から清初までの僧侶 2800 人の生卒年を考證したもの。舊版に比べ、人名索引を増補。

234 『中國佛教人名大辭典』震華、《中國佛教人名大辭典》編輯委員會編

上海・上海辭書出版社 1999

中國佛教關連の人物 16973 名を收載、配列は畫數順、卷末に「中國佛教大事年表」あり。

□文學關連の人物

235 『中國文學家大辭典』譚正璧編

上海・光明書局 1934

老子から近代までの文學者に關して、各史藝文志や四庫全書所收の人名も含めた事典。

6800 項目以上、索引あり。1961 年香港・文史出版社、1981 年上海・上海書店が影印。

236 『六朝詩人傳』興膳宏編 東京・大修館書店 2000

六朝の詩人 79 名の傳記と正史の文學論 4 篇に詳細な譯注を施す。各人の著述關連情報も有益。他に礪波護「六朝の官職名」(V-275)、系圖、年表、人名・作品名索引、地圖を附す。

237 『唐代の詩人 その傳記』小川環樹編 東京・大修館書店 1975

唐代の文學者 62 家の傳記に詳細な譯注を加える。人物のみならず、各人の著述についても有益な資料を提供。また、礪波護「唐の官制と官職」(V-276)、清水茂「唐代詩人の傳記資料」(I-11 に再録)も有用。卷末に年表、人名・地名・官名索引、地圖あり。

238 『中國文學家大辭典』先秦漢魏晉南北朝卷 曹道衡・沈玉成編

北京・中華書局 1996

239 『中國文學家大辭典』唐五代卷 周祖譔主編

北京・中華書局 1992

240 『中國文學家大辭典』宋代卷 曾棗莊主編

北京・中華書局 2004

241 『中國文學家大辭典』遼金元卷 鄧紹基・楊鑑主編

北京・中華書局 2006

242 『中國文學家大辭典』清代卷 錢仲聯主編

北京・中華書局 1996

243 『中國文學家大辭典』近代卷 梁淑安主編

北京・中華書局 1997

238～243 は共に文學關係の人物を畫數で配列して解説。238 以外は出典の情報も充實。

□藝術関連の人物

244 『中國美術家人名辭典(修訂本)』俞劍華編 上海・上海人民美術出版社 1987

1981 年版を修訂。舊版に「補遺」、「勘誤與修訂」、「附録三」を補い、收録人名も増加。

245 『中國歷代書畫篆刻家字號索引』商承祚・黃華編 京・人民美術出版社 1960

上册は字號から本名、下册は逆の検索が可能。1970 年京都・中文出版社の影印本あり。

246 『清代書畫家字號引得』蔡金重編、燕京大學圖書館引得編纂處校訂

北平・哈佛燕京學社 1934

清代の藝術家について傳記の所在を索引化、姓名から別名及びその逆の形で検索が可能。

iv. 非漢字文化圏の固有名詞索引

247 『中日歐對照世界地名人名辭典』竹之内安巳

東京・國書刊行會 1978

地名(約 20000)・人名(約 7500)の二部構成、ウェード式ローマ字表記順配列、各部

末に首字總畫索引を附す。中國語に音譯した地名・人名の原綴・日本語讀みが検索可能。

248 『中・日・歐對照世界地名辭典』

鳥居久靖監修・前田清茂・三好成美編

天理・天理大學出版部 1967

中國外の地名約 7000 を中國語表記の拼音で配列、日本語讀みと原綴を示す。索引あり。

249 『外國人名辭典』

上海・上海辭書出版社 1988

10510 人の非中國人（日本人を含む）を姓名（漢字表記）の画数順に配列。簡単な履歷と原綴を示す。巻首に「詞目表」、巻末に附録と「外國人名譯名索引」（原綴）を附す。

250 『日英漢世界地名詞典』霍郁華主編

北京・商務印書館 1990

日本語の五十音順に世界の地名を配列、原綴と中國語の解説を附す。漢字表記索引あり。

251 『英漢人物、地名、事件詞典』靳平妥主編

北京・外語教學與研究出版社 1991

項目數 11000 餘、巻末の索引で中國語（音譯）から歐米等の人名などの原綴が検索可能。

v. 年譜の手引

252 『歷代名人年譜總目』王寶先編

臺中・東海大學圖書館 1965

253 『中國歷代人物年譜考録』謝巍編

北京・中華書局 1992

1983 年以前に編まれた 4010 人 6259 種の目録、譜主に短い説明を附す。姓名索引あり。

254 『中國歷代年譜總録（増訂本）』楊殿珣編

北京・書目文獻出版社 1996

2396 人の年譜 4450 種、參考文獻 645 條を時代・人物順に列舉、姓名別名索引を附す。

255 『中國年譜辭典』黃秀文主編

上海・百家出版社 1997

1993 年以前に編まれた 2431 人 4115 種の目録、譜主に解説を加える。譜主・譜名索引あり。

256 『中國歷代名人年譜總目増訂版』王德毅編

臺北・新文豐出版 1999

1979 年華世出版社版を増訂。20 世紀末までの 1715 人が対象。譜主・編者の姓名索引を附す。

257 『近三百年人物年譜知見録』來新夏

上海・上海人民出版社 1983

清朝治下に生きた人物の年譜 800 餘種の目録、時代順配列、巻末に譜主・譜名索引あり。

V. 地名の調査（附・官名の解説）

i. 地名の辭典

258 『讀史方輿紀要』顧祖禹撰

版本は複数存するが、利用には 1955 年、北京・中華書局が刊行した排印本が便利。

259 『大清一統志』（嘉慶重修一統志）道光二十二年奉敕撰

「四部叢刊續編」本は卷末に詳細な地名索引を附す。その系統の影印本が複数存在。

260 『歴代沿革表』段長基撰

歴代の地名・行政区劃に関する沿革を解説、表示する。古地名・別名の情報を多く含む。

261 『中國郡邑雅名索引』京都大學文學部東洋史研究室編

京都・京都大學文學部東洋史研究室 1959

260（「四部備要」本）の索引。正式な地名から別名、その逆の検索が可能、五十音配列。

262 『讀史方輿紀要索引支那歴代地名要覽』青山定雄編

東京・東方文化學院東京研究所 1933

1974 年、東京・省心書房の増補訂正版（『讀史方輿紀要索引中國歴代地名要覽』）等あり。

263 『中國古今地名大辭典』臧勵齋等編、陳正祥續編 臺北・商務印書館 1966

1930 年商務印書館版に比べて、續編（臺灣等の地名が対象）を附し、附録等も増補。

264 『中國歴史地名大辭典』劉鈞仁原著、鹽英哲編 東京・凌雲書房 1980・81

1930 年國立北平研究所出版部刊『中國地名大辭典』の修訂稿を日本語で更に増補訂正。

265 『中國歴史地名大辭典』魏嵩山主編 廣州・廣東教育出版社 1995

1949 年以前の古地名を畫數順に配列し、簡単に解説。首字筆畫檢索表・音序索引あり。

266 『中國歴史地名大辭典』史爲樂主編 北京・中國社會科學出版社 2005

收録項目數 70000 餘、畫數順に古地名等を配列し、説明を加える。各冊冒頭に目録あり。

267 『中國地名詞典』 上海・上海辭書出版社 1990

收録項目數 21240、畫數順に地名を配列する。対象は古代から 1980 年代の地名に渉る。

268 『中國古今地名大詞典』《中國古今地名大詞典》編纂委員會編

上海・上海辭書出版社 2005

古今に渉る地名 60000 餘條を收録、畫數順に配列し、沿革等について解説を施す。

269 『中華人民共和國地名詞典』各編纂委員會編 北京・商務印書館 1988～95

270 『中華人民共和國行政區劃簡冊』中華人民共和國民政部編

北京・中國地圖出版社 1952～

編者・出版者には變遷がある。最新の地理情報（地名・人口・面積等）を知るには便利。

ii. 歴史地圖等

- 271 『アジア歴史地圖』松田壽男・森鹿三編 東京・平凡社 1966
『アジア歴史事典』(Ⅱ-52)別巻。總圖と地域圖、索引から成る。1984年新裝復刊。
- 272 『中國歴史地圖集』Ⅰ～Ⅷ 譚其驤主編 北京・地圖出版社 1982・87
第2刷以降の出版者名は「中國地圖出版社」。
- 273 『中華人民共和國分省地圖集』(第5版)中國地圖出版社編
北京・中國地圖出版社 1992

附・官名の解説

- 274 『中國歷代職官辭典』日中民族科學研究所編 東京・國書刊行會 1980
1987年、中州古籍出版社が本書の中國語版(向以鮮・鄭天剛譯、書名は同じ)を刊行。
- 275 「六朝の官職名」(『六朝詩人傳』[Ⅳ-236]所收)礪波護 東京・大修館書店 2000
六朝時代の官職名を五十音順に列挙して、それぞれの職務内容について簡潔に説明する。
- 276 「唐の官制と官職」(『唐代の詩人』[Ⅳ-237]所收)礪波護 東京・大修館書店 1975
著名な詩人の例を挙げて、唐代の官職について一般的な解説を施す。本文の他、「唐代百官表」を附す。『唐代政治社會史研究』(同朋舎出版、1986年)、『唐の行政機構と官僚』(中公文庫、1998年)に再録。これら兩書では、卷末の索引で各官職に関する解説部分が検索可能。
- 277 「宋代官制序説—宋史職官志を如何に讀むべきか—」
(『宋史職官志索引』佐伯富編 東洋史研究叢刊 11) 宮崎市定
京都・東洋史研究會 1963
宋代官制史全體に關する専門的論文。『宮崎市定全集』10(岩波書店、1992年)に再録。
- 278 『中國歷代職官辭典』邱樹森主編 臺北・商鼎文化出版 1999
- 279 『中國歷代職官別名大辭典』龔延明 上海・上海辭書出版社 2006
歷代の官職、殊にその別名 9400 餘(子目 30000 以上)を畫數順に配列、説明を加える。

VI. 鈔刻(出版事項)の知識

i. 出版・版刻

- 280 『出版詞典』邊春光主編 上海・上海辭書出版社 1992
收録語彙 5937 條。12 の分野に分けて、出版關連用語を解説。卷末に詞目筆畫索引あり。

- 281 『文獻學大辭典』趙國璋・潘樹廣主編 揚州・廣陵書社 2005
『文獻學辭典』（江西教育出版社、1991年）を増補、見出し4400條餘、附目1600餘。
- 282 『中國古籍版刻辭典（増訂本）』瞿冕良編 蘇州・蘇州大學出版社 2009
1999年の濟南・齊魯書社版を大幅に増補、収録項目は21500餘條に及ぶ。畫數順配列。
- 283 『日本古典籍書誌學辭典』井上宗雄等編 東京・岩波書店 1999
- 284 『中國版刻綜録』楊繩信編 西安・陝西人民出版社 1987
- 285 『中國出版文化史－書物世界と知の風景－』井上進 名古屋・名古屋大學出版會 2002
出版文化という觀點から主に明末までの中國における出版史をたどる。卷末に索引あり。

ii. 紀年

- 286 『東方年表』藤島達朗・野上俊靜編 京都・平樂寺書店 1955
大字版(1996年)あり。後の刷次になるほど追記(2007年第36刷は2010年まで掲載)。
- 287 『陳氏中西回史日曆』陳垣 北京・國立北京大學研究所 1916
西曆1～1940年の陰曆・陽曆・回教曆相互の年月日を對照・表示。1962年中華書局版あり。
- 288 『二十史朔閏表』陳垣 北京・中華書局 1962
諸種の舊版を増補。前漢初から西曆2000年までの陰曆・陽曆の年月日を對照した形で表示。
- 289 『中國史曆日和中西曆對照表』方詩銘・方小芬編 上海・上海辭書出版社 1987
上下編・附編を通じて、前841～後2000年までの陰曆・陽曆の年月日を對照した形で表示。

iii. 避諱

- 290 『史諱舉例』陳垣 北京・科學出版社 1958
戦前に刊行された舊版（複數存在）を修訂。1962年中華書局が再版、他にも各種の版あり。
- 291 『史諱辭典』王建 東京・汲古書院 1997
- 292 『歷代避諱字匯典』王彥坤編 鄭州・中州古籍出版社 1997

iv. 叢書

- 293 『中國叢書綜録』上海圖書館編 上海・上海古籍出版社 1982
舊版は 1959～61 年中華書局刊、1986 年版は判型が小さい。全 3 冊である點はいずれも同じ。
- 294 『中國叢書綜録補正』陽海清編、蔣孝達校訂 揚州・江蘇廣陵古籍刻印社 1984
- 295 『中國叢書總録續編』施廷鏞編 北京・北京圖書館出版社 2003
- 296 『中國叢書廣録』陽海清・陳彰璜編 武漢・湖北人民出版社 1999
- 297 『漢籍叢書所在目錄』東洋學文獻センター連絡協議會編 東京・東洋文庫 1966
國內 7 機關の漢籍叢書所在状況を目録化、卷末に書名筆畫索引・索引字頭拼音索引あり。
- 298 『日本見藏中國叢書目初編』（日本文化研究叢書）李銳清編 杭州・杭州大學出版社 1999
日本の 16 機關を対象にそれらが所藏する叢書を目録化。卷末に書名・別名・撰者索引を附す。
- 299 『四庫系列叢書目錄・索引』復旦大學圖書館古籍部編 上海・上海古籍出版社 2007
四庫全書關連叢書（多くは大部）の子目と書名・著者名の四角號碼による索引から成る。

VII. 資料の讀解と研究法

i. 字書と一般語彙の辭典

- 300 『康熙字典』康熙五十五年奉敕撰（張玉書等）
1935 年商務印書館版は卷末に親字の所在頁を示した索引（四角號碼）を附し、利用に便利。
- 301 『漢語大字典』I～IX 漢語大字典編輯委員會編 成都・四川辭書出版社、武漢・湖北辭書出版社 1986～90
親字 54678 字を 200 種の部首に分類、最終卷は論文集。正文のみの縮印本（1993 年）あり。
- 302 『辭源』修訂版 廣東、廣西、湖南、河南辭源修訂組・商務印書館編輯部編 北京・商務印書館 1979～83
- 303 『辭海（1999 年版彩圖本）』辭海編輯委員會編 上海・上海辭書出版社 1999

- 304 『中文大辭典』（第一次修訂版・普及本）中文大辭典編纂委員會編
臺北・中華學術院、中國文化研究所 1973
- 『大漢和辭典』（Ⅱ-49）の舊版を基礎に部分的補訂を加えて、熟語を字畫順に配列したもの。1962～68年中國文化研究所版（全42冊）を修訂。全10冊、最終冊に筆畫檢字表を附す。
- 305 『漢語大詞典』Ⅰ～Ⅻ・索引 上海・上海辭書出版社 1986
- 306 『多功能漢語大詞典索引』漢語大詞典編纂處・禪文化研究所編
上海・漢語大詞典出版社 1997
- 親字別（部首順）配列、二字熟語、三字以上熟語、同（類）字重出型熟語（例：一人作事一人當）ごとに索引を設ける。巻首に各種熟語別部首檢字表、全體の拼音檢字表あり。
- 307 『漢語大詞典詞目音序索引』漢語大詞典編纂處編 上海・漢語大詞典出版社 2003
- 拼音順配列（聲調は無視）、306と同じく305『漢語大詞典』の語彙索引。
- 308 『漢語大詞典拾補』王宣武 貴陽・貴州人民出版社 1999
- 305『漢語大詞典』の用例における不備を修訂し、未收語を集めて語釋を施す。檢字表あり。
- 309 『佩文韻府』康熙五十五年奉敕撰（張玉書等、『拾遺』を除く）
上海・商務印書館 1937
- 四角號碼による語彙索引あり。1966年に臺灣商務印書館が再版、現在ではこの系統が普及。
- 310 『中日大辭典』（増訂第二版）愛知大學中日大辭典編纂處編
東京・大修館書店 1987
- 311 『中國語大辭典』大東文化大學中國語大辭典編纂室編 東京・角川書店 1994
- 312 「中國語（北京語）」（『世界のことは・辭書の辭典 アジア編』石井米雄編）
佐々木猛等 東京・三省堂2008
- 中國の辭書史、現代の中國語辭書・百科事典・文法書、入門書について系統的に敘述。

ii. 研究入門・ガイドブック

- 313 「中國を知るための辭典・事典ガイド」（『月刊しにか』10-5）相原茂等
東京・大修館書店 1999
- 『しにか』誌の特集。辭典・事典・參考圖書を16の分野・テーマ別に取り上げて紹介。
- 314 『中國の古典名著・總解説』 東京・自由國民社 2001

同じ書名で度々修訂。歴代の名著・著述家の解題、名言の解説等の情報が手軽に分かる。

315 『中國 21』Vol.23 愛知大學現代中國學會編 名古屋・風媒社 2005

「シノロジー（古典中國學）の現在」と銘打って座談會（總説）、世界の中國學（各國の研究状況）、道具と手法（コンピュータ等の利用）、概説／入門書／研究概要の刊行、を論述。

316 『日本古代史を學ぶための漢文入門』池田温編 東京・吉川弘文館 2006

「日本古代史」と題するが、中國學研究や漢籍について有用な情報に富む。索引を附す。

317 『京大人文研漢籍セミナー』

京都大學人文科學研究所附屬漢字情報研究センター編 東京・研文出版 2008～

講演の内容を文章化。毎冊、中國學における一テーマを扱った總説と三篇の論考を収載。

318 『中國古典を読むために 中國語學史講義』頼惟勤、水谷誠編

東京・大修館書店 1996

中國古典を読む上で必要な、特に小學（語學）の知識を敘述。書名・巻末に人名・事項索引を附す。

319 『アジア歴史研究入門』Ⅰ～Ⅴ・別巻 島田虔次等編

京都・同朋舎出版 1983～87

第1巻の島田虔次「序論」は中國史全般に関わる研究工具書等について詳しい解説を加える。

320 『中國史研究入門（増補改訂版）』山根幸夫編 東京・山川出版社 1991・95

321 『中國歴史研究入門』礪波護等編 名古屋・名古屋大學出版會 2006

322 『近代中國研究入門』坂野正高等編 東京・東京大學出版會 1974

アヘン戦争に始まる中國近現代史研究入門、第一章が市古宙三「研究のための工具類」。

323 『本草概説』岡西爲人 大阪・創元社 1977

附録「中國歴代本草書目」の他、本文にも本草書の解題が見え、巻末の索引で検索可能。

324 『中國醫學の歴史』傳維康主編、川井正久編譯 市川・東洋學術出版社 1997

〔原著：『中國醫學史』1990年、上海・上海中醫學院出版社〕書名と人名の解説が豊富。

説明も詳しいので事典の代用が可能。事項・用語、人名、書名の各索引を巻末に附す。

325 『第二版 中國書道辭典』中西慶爾編 東京・木耳社 2005

中國書法史に関する見出し語 6392 に解説を施す。書學・書論関連の語彙も多く含む。

326 『中國書法史を學ぶ人のために』杉村邦彦編 京都・世界思想社 2002

研究入門書、時代・分野ごとに敘述。巻末に人名索引、書名・論文名・作品名索引あり。

327 『中國書道文化辭典』西林昭一

京都・柳原出版 2009

項目数約 7000、五十音順配列。附録 CD-ROM の他、術語、見出し項目一覧を附す。

328 『中國書法大辭典』梁披雲主編 香港・書譜出版社 1984

見出し 13650 條を分野別に配列。巻首に「總目錄」、巻末に「總索引」あり。圖版多数。

329 『中華書法篆刻大辭典』李國鈞主編 長沙・湖南教育出版社 1990

書法関連事項を分野・時代順に解説、人名・書名解題として使用可能。四角號碼索引付。

330 『中國繪畫史事典』王伯敏、遠藤光一譯 東京・雄山閣出版 1996

〔原著：『中國繪畫史』1982 年、上海・上海人民美術出版社〕通史的敘述、索引あり。

331 『中國佛教研究入門』岡部和雄・田中良昭編 東京・大藏出版 2006

「中國佛教を學ぶ人びとへの研究ガイドブック」（本書「はしがき」）。巻末に索引あり。

332 『道教事典』野口鐵郎等編 東京・平河出版社 1994

項目数 1135、五十音順配列。中國道教の現状、道藏番號對照表、索引、項目分類あり。

333 『中國文學を學ぶ人のために』興膳宏編 京都・世界思想社 1991

先秦から清末までジャンルごとに中國古典文學の概略・研究課題を敘述。索引・年表付。

334 『清末小説研究ガイド 2008』樽本照雄編 天津・清末小説研究會 2008

『清末小説研究ガイド 2005』（2004 年）を改訂。「第 2 部 ガイド」は清末小説関連のものが中心だが、文學・歴史、特に小説・近代史研究にも有益な論著 1282 件を紹介。

iii. 工具書使用法等

335 『中國學レファレンス事典』潘樹廣編著・松岡榮志編譯 東京・凱風社 1988

〔原著：『書海求知 文科学文献检索方法释例』1984 年、上海・知識出版社〕考古・歴史をはじめ、芸術・科学技術などに関する工具書の解説。1987 年、知識出版社は同じ原著者の『書海求知 文科学文献检索方法释例（續編）』を刊行、101 の例を挙げて調査の手法を論じる。

336 『文史工具的源流和使用』王明根等 上海・上海人民出版社 1980

337 『文史哲工具書簡介』南京大學圖書館、中文系、歴史系編寫組編

天津・天津人民出版社 1980

338 『文史工具書詞典』祝鴻熹・洪湛侯編 杭州・浙江古籍出版社 1990

工具書および版本學用語などにも及ぶ辭典。年表などの附録あり。

339 『中文工具書使用方法』武漢大學圖書館學系編 北京・商務印書館 1982

340 『目錄學與工具書』蔣禮鴻 杭州・浙江古籍出版社 1985

341 『中文工具書參考資料』朱天俊・倪曉建編 北京・北京師範大學出版社 1986

工具書関連の研究論文等 38 篇の文章を収載、巻末に附録「中文工具書研究資料索引」あり。

342 『文史工具書概述』趙國璋等 南京・江蘇教育出版社 2006
基礎篇と 1000 餘種の文獻を紹介する類型篇・使用篇から成る。巻末に拼音書名索引を附す。

VIII. その他の文獻

i. 書誌學者の著作集成

343 『長澤規矩也著作集』I～X・別巻 東京・汲古書院 1982～89
344 『阿部隆一遺稿集』I～IV 東京・汲古書院 1985～93

ii. 藏書印・刻工名

345 『中國藏書印提要 印文篇』（日本書誌學大系 93-1）相島宏編
立川・青裳堂書店 2006
67 種の文獻から抽出した（本名が分かる中國人のもののみ）の印文を五十音順に配列。
346 『古籍刻工名録』張振鐸編 上海・上海書店出版社 1996
唐五代から宋元、明、清の三部構成。古籍に見られる刻工名を各書別に列挙して索引化。

iii. 研究論著索引

347 『東洋學文獻類目』
京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター編
京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター 1934～
舊名『東洋史研究文獻類目』、『東洋學研究文獻類目』。センター受入の學術雜誌所載中國學関連論文、所藏單行本（書評の對象となった圖書も含む）を年次ごと分野別にした索引。インターネット上で検索が可能、IXを参照。
348 『史學雜誌』史學會 東京・史學會、山川出版社 1889～
当初は『史學會雜誌』。「文獻目録」や年 1 回の「回顧と展望」號が論著紹介として有用。
349 『東洋史研究』東洋史研究會編 京都・東洋史研究會 1935～

復刻版（第 25 巻まで、同朋舎出版、1982 年）がある。「近刊叢欄」が論著目録の用をなす。

350 『日本中國學會報』日本中國學會編 東京・日本中國學會 1949～
「學會展望」が哲學・文學・語學の論著目録として機能する。解説・寸評を附す號あり。

351 『中國思想・宗教・文化關係論文目録』中國思想宗教史研究會編
東京・國書刊行會 1976

明治初年より 1973 年までの雑誌・論文集掲載論文（日本語）の目録。著者名索引あり。

352 『中國研究文獻案内』市古宙三、J.K.フェアバンク 東京・東京大學出版會 1974
John King Fairbank “The United States and China” Harvard University Press, 1971
の Suggested Reading（アメリカの中國研究文獻リスト）にフェアバンク氏が新刊書を、
市古氏は日本人の研究文獻、時に中國人のものを含めて加えて單行本化。附録あり。

353 『中國文學研究文獻要覽 1945～1977（戦後編）』
石川梅次郎監修、吉田誠夫等編 東京・日外アソシエーツ 1979
日本國內における文革期までの中國文學研究文獻を時代・主題別に配列。対象は 1945
～77 年。巻首に「研究文獻の利用案内」、巻末に事項、人名、作品・書名、著者名の各
索引を附す。

354 『中國文學研究文獻要覽 古典文學 1978～2007』
川合康三監修、日外アソシエーツ編 東京・日外アソシエーツ 2008
先秦から清末までの日本國內で發表された中國文學研究文獻を時代・主題別に配列する
點は 353 に同じ。時期は 1978～2007。巻末に事項名索引、著者名索引、収録誌名一覧
がある。

355 『中國古典文學案内』日外アソシエーツ編 東京・日外アソシエーツ 2004
1945～2003 年までの中國古典文學関連の圖書を主要作品・人物ごとに著録、項目索引
を附す。

356 『中國關係論說資料』論說資料保存會編 東京・論說資料保存會 1964～
専ら中國を対象としない逐次刊行物に掲載された中國に関する論説の目録を巻首に置
き、論文自體を多く轉載する。年次ごと、4 分冊。

357 『複印報刊資料』中國人民大學書報資料中心編
北京・中國人民大學書報資料中心 1981～
中国大陆で出版された雑誌や大學の紀要掲載された論文を選録したもの。分野ごとに編
集、毎月刊行され、同分野における論文の索引を掲載。別に『報刊資料索引』もある。

358 『全國報刊索引（哲學社會科學版）』《全國報刊索引》編輯部編

上海・《全國報刊索引》編輯部 1955～
月刊。各時期に中國で刊行された新聞・雑誌から選んだ文章の目録。作者索引がある。
359 『中國索引綜録』盧正言主編 上海・上海辭書出版社 2000
1900～98年の索引文獻 3192種を目録化、分野別配列、卷末に書名・編者名索引を附す。

IX. コンピュータの利用

- 360 『電腦中國學 インターネットで廣がる漢字の世界』漢字文獻情報處理研究會編
東京・好文出版 1998
- 361 『電腦中國學 II』漢字文獻情報處理研究會編 東京・好文出版 2001
- 362 『漢字文獻情報處理研究』漢字文獻情報處理研究會編 東京・好文出版 2000～
毎號のソフトウェアレビュー、學術リソースレビューがコンピュータによる情報検索等の
の新知識を提供。漢字文獻情報處理研究會のホームページ (IX) から第4號まで閲覽が
可能。
- 363 『コンピュータで中國語－Win&Mac』二階堂善弘等編 東京・大修館書店 1999
『月刊しにか』1999年5月號別冊。パソコンでの中國語使用の概説書。CD-ROM 付。
- 364 『ユニコード漢字情報辭典』ユニコード漢字情報辭典編集委員會編
東京・三省堂 2000
Unicode Version2.0に基づき、同3.0も反映。CJK 統合漢字情報の全漢字 20902字を
收録。
- 365 「中國系お役立ちサイト 70」(『月刊しにか』14・7) 山田崇仁等
東京・大修館書店 2003
『しにか』誌の特集。歴史・文學・思想・現代事情・漢字に分類し主に日本のサイトを
紹介。

中國學關連の Web site # [] 内は別名、表題の後の () 内は運營者・管理者。

□漢籍目録データベース

・全國漢籍データベース

(京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター)

<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki/>

＊運営者以外に東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター及び国立情報学研究所が幹事機関を務める。

- ・WEB 懷徳堂（大阪大学中国哲学研究室）

<http://kaitokudo.jp/index.html>

＊懷徳堂の沿革・資料等の他、「懷徳堂文庫電子圖書目録」を公開、情報を順次修訂。

- ・中国国家图书馆・中国国家数字图书馆（中国国家图书馆）

<http://www.nlc.gov.cn/>

- ・国家图书馆・国家数位图书馆〔国家图书馆全球资讯网〕（台湾・国家图书馆）

<http://www.ncl.edu.tw/mp.asp?mp=2>

＊「漢學資料」、「古籍文献」、「電子資料庫」に検索システムがまとめられている。

- ・全国圖書書目资讯网（台湾・国家图书馆書目资讯中心）

<http://nbnet2.ncl.edu.tw/>

＊「中文古籍書目資料庫」や「臺灣地區善本古籍聯合目錄」等が使用可能。

- ・香港大学图书馆（香港大学图书馆）

<http://www.lib.hku.hk/>

＊「HKUL Digital Initiatives」に「日本見藏叢書目録」（VI-iv-298 参照）等が見える。

□漢籍・中國學の参考資料

- ・漢籍目録入門（九州大学學術情報リポジトリ）

<https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/bitstream/2324/5592/1/2006%E6%BC%A2%E7%B1%8D%E7%9B%AE%E9%8C%B2%E5%85%A5%E9%96%80%28%E8%B3%87%E6%96%99%29.pdf>

＊科学研究費基盤研究（C）「中国古典通俗文藝研究のための書目データベースの構築と公開」における中里見敬氏の研究成果。

- ・漢籍の探し方（京都大学图书馆機構）

http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/refguide/index.php?content_id=16

＊大西賢人氏によるレファレンスガイド。

- ・○中国學参考書〔學部授業参考書目録（入門書・啓蒙書中心）〕（土田健次郎氏）

<http://www.f.waseda.jp/kdota/jyugyo.html>

□和刻本・朝鮮本

- ・ヴァーチャル展示 和書のさまざまー書誌學入門ー（國文學研究資料館）

<http://www.nijl.ac.jp/~koen/washyonosamazama/index.htm>

- ・和刻本漢籍総合データベース（國文學研究資料館）

http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/WKNDefault.exe?DB_ID=G0004020WKN&GRP_ID=G0004020&DEF_XSL=default&IS_TYPE=csv&IS_STYLE=default

- ・日本現存朝鮮古書データベース検索システム
（日本現存朝鮮古書データベース検索システム作成チーム）

<http://stl30.itc.u-toyama.ac.jp/dokb/>

＊藤本幸夫氏『日本現存朝鮮本研究 集部』（Ⅲ-105）に基づく検索システム。

□古典文獻の閲覧・検索

- ・漢籍電子文獻資料庫〔新漢籍全文〕（臺灣・中央研究院歷史語言研究所）

<http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm>

- ・文物圖象研究室資料庫（臺灣・中央研究院歷史語言研究所）

<http://saturn.ihp.sinica.edu.tw/~wenwu/ww.htm>

- ・故宮【寒泉】古典文獻全文檢索資料庫（臺灣・故宮博物院）

<http://libnt.npm.gov.tw/s25/>

- ・國學網站（首都師範大學電子文獻研究所）

<http://www.guoxue.com/>

- ・Chinese Text Project〔中國哲學書電子化計劃〕（Donald Sturgeon 氏）

<http://chinese.dsturgeon.net/>

＊英語版・繁體字版・簡體字版が揃っている。

□東洋學に關する情報

- ・漢字文獻情報處理研究會ホームページ（漢字文獻情報處理研究會）

<http://www.jaet.gr.jp/>

＊「Kanhoo!東洋學サーチ」<http://www.jaet.gr.jp/kanhoo/>はこの site 内に見える。

- ・アジア研究情報 Gateway（東京大學東洋文化研究所附屬東洋學研究情報センター）

<http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

- ・ 國立國會圖書館關西館アジア情報室アジア関係リンク集（國立國會圖書館）

http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/asia/link/asia_05link.html

□ 書體・字體

- ・ CHISE IDS 漢字檢索（守岡知彦氏）

<http://chise.zinbun.kyoto-u.ac.jp/ids-find>

- ・ 拓本文字データベース

（京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター）

http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/t_menu.html

- ・ 漢字字體規範データベース（漢字字體規範データベース編纂委員會）

<http://www.joao-roiz.jp/HNG/>

- ・ 漢字袋（安岡孝一氏・安岡素子氏）

<http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~yasuoka/kanjibukuro/>

- ・ 《教育部》異體字字典（臺灣・教育部國語推行委員會）

<http://140.111.1.40/main.htm>

- ・ 中國語電腦學習室－漢字字典～簡體字、繁體字、ピンイン檢索～（中國語電腦學習室）

<http://www.schoin.org/hanyu/hanzi/index.jsp>

□ 史部

- ・ 東洋史研究リンク集（中國史・臺灣史・朝鮮史等）（青木敦氏）

http://t_links.at.infoseek.co.jp/

- ・ 金秋白庵－大澤正昭のホームページ（大澤正昭氏）

<http://pweb.sophia.ac.jp/kinshuhakuan/>

- ・ 唐代人物知識ベース（京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター）

<http://tkb.mydns.jp/pers-db/>

＊京都大學 21 世紀 COE 東アジア世界の人文情報學研究教育據點「漢字文化の全き繼承と發展のために」の成果。

- ・ 九思亭－潘呂棋昌教學／研究網站（潘呂棋昌氏）

<http://www.cc.nctu.edu.tw/~lccpan/newpage1.htm>

＊臺灣・國立交通大學・潘呂棋昌氏が運營、site 内に「唐代文史研究資料庫」がある。

- ・唐・五代十國時期墓誌・墓碑データベース（中國石刻文物研究會）

<http://sekkokuken.mind.meiji.ac.jp/doc/find.htm>

□子部（藝術・醫學關係を含む）

- ・大阪大學中國哲學研究室（大阪大學大學院文學研究科文化形態論中國哲學研究室）

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/>

＊大學の中國學關連講座も多く Web page を設けているが、いくつか挙げるに止める。

- ・東洋大學文學部中國哲學文學科（東洋大學文學部中國哲學文學科）

<http://bunbun.toyo.ac.jp/chutetsu/index.htm>

＊「資料室」に「中國宗教關係文獻目錄（道教篇）」と「中国思想用語漢・英対照稿」がある。

- ・宇佐美研究室（宇佐美文理氏）

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~bunrius/indexj.html>

＊「中國哲學と中國藝術」がテーマ、site 内に「中國文獻學書籍目錄」も見える。

- ・中華藝術家（黃簡藝術工作室）

<http://www.chinese-artists.net/>

- ・琴詩書畫巢（荒井雄三氏）

<http://www.geocities.jp/qsshc/index.html>

＊site 内に「中國書法史參考書」、「中國繪畫史參考書」の兩リストが見える。

- ・柳上書屋（嶋田英誠氏）

<http://www2.mmc.atomi.ac.jp/web01/>

＊「嶋田研究室」に入ると中國繪畫史辭典、參考文獻・工具書の紹介が見える。

- ・神奈川縣横濱市戸塚區吉田町の吉岡鍼灸院（鍼灸専門の治療院）（吉岡鍼灸院）

<http://m.yoshioka49in.com/index.htm>

＊吉岡廣記氏作成、「資料室」から醫學關連論著を中心とした「工具書」が閲覧できる。

□佛教・道教

- ・大正新脩大藏經テキストデータベース（大藏經テキストデータベース研究會）

<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>

- ・CBETA 中華電子佛典協會（中華電子佛典協會）

<http://www.cbeta.org/>

- ・ 禪籍データベース（花園大學國際禪學研究所）

http://iriz.hanazono.ac.jp/frame/data_f00a.html

- ・ インド學佛教學論文データベース（日本印度學佛教學會）

<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/INBUDS/search.php>

- ・ 東洋學研究者のための電腦四寶 道氣社（麥谷邦夫氏）

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~dokisha/>

＊ 検索システムその他、「中國思想研究者のためのインターネット資源簡介」もある。

□ 集部

早大中文 | 早稻田大學中國語中國文學（早稻田大學文學部中國語中國文學研究室）

<http://www.waseda.jp/bun-chubun/>

＊ site 内に「中文リンク集」もある。

- ・ 元智大學羅鳳珠－中國文學網路研究室－唐宋文史資料庫（羅鳳珠氏）

<http://140.138.172.55/TASUHOME.HTM>

- ・ 國立暨南國際大學中國語言文學系（臺灣・國立暨南國際大學中國語言文學系）

<http://www.clc.ncnu.edu.tw/>

＊ 「古籍資料庫」に「詩話資料庫」を初めとした文學關係の検索システムが見える。

□ 日本漢學

- ・ 日本漢文文獻目錄データベース（二松学舎大學日本漢文教育研究プログラム）

<http://www.nishogakusha-kanbun.net/database/>

- ・ 近世儒學データベース（早稻田大學文學部）

<http://db2.littera.waseda.ac.jp/wever/jugaku/goLogin.do>

＊ 制作者は土田健次郎・片岡龍・矢崎浩之の三氏。

□ 中國曆と西曆の變換

- ・ 兩千年中西曆轉換（臺灣・中央研究院計算中心）

<http://db1x.sinica.edu.tw/sinocal/>

□論著索引

- ・東洋学文献類目検索[第 6.10 版]

(京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター)

<http://ruimoku.zinbun.kyoto-u.ac.jp/ruimoku/index.html.ja>

＊Ⅷ-347 のネット上における検索システム。

- ・ACADEMIC RESOURCE GUIDE (岡本眞氏)

<http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/ARG/>

□中國書籍の新刊情報

- ・書虫－中國書籍ネット書店 (書虫)

<http://www.frelax.com/sc/>

□その他の個人による Web page

- ・睡人亭 (山田崇仁氏)

<http://www.shuiren.org/>

＊「中國書籍販賣店データベース」 <http://www.shuiren.org/books/index-j.html>

他、各種マニュアル・データ類が見られる。

- ・過立齋 (秋山陽一郎氏)

<http://www.karitsu.org/>

- ・Kiyohara's Page 清原的主頁 (清原文代氏)

<http://www.las.osakafu-u.ac.jp/~kiyohara/>

- ・中國學網頁搜尋器 (川口秀樹氏)

<http://www.ne.jp/asahi/sinology/lib/>

- ・電腦瓦崗寨～趣味人・千田大介の Web サーバ～ (千田大介氏)

<http://wagang.econ.hc.keio.ac.jp/>

- ・岩野忠昭のお部屋 (岩野忠昭氏)

<http://www.rockfield.net/index.htm>

- ・羣龍天に在り (中根東龍氏)

<http://ueno.cool.ne.jp/souryuu/>

・ 虎溪之橋（光田雅男氏）

<http://www011.upp.so-net.ne.jp/hu-xi/index.html>

ORIENTAL STUDIES REFERENCE SERIES

No. 18

On Reference Tools for Chinese Studies:

Arrangement of Old Chinese Books

By

NAGATA Tomoyuki

CENTER FOR INFORMATICS
IN EAST ASIAN STUDIES
INSTITUTE FOR RESEARCH IN HUMANITIES
KYOTO UNIVERSITY

2009

〔東方學資料叢刊 第18冊〕

工具書について ― 漢籍の整理 ―

編 者 永 田 知 之
発行日 2009 年 9 月30日
制作者 明文舎印刷株式会社
発行者 京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター
〒606-8265 京都市左京區北白川東小倉町47
Tel. 075-753-6997 Fax. 075-753-6999
<http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>
